

小田原史談

第 140 号

発行所 小田原史談会
小田原市本町1-6-20

景観保持を一片の葉書に托した白秋

北原白秋は、尾崎亮司宛に次の文面の葉書を出している。

啓上其後は御無沙汰仕候
さてこの頃は、大嶋大将無風流にもその邸内の老松を片はしより伐り倒し、いまは、わずかに二、三本をあますことに成候、これも続いて伐る様子相見え候。武人銭を愛すること祥代の禍と存候。これにて貸家を立つる由きき及び候。同所は居神社の旧境内にてこの風致は小田原第一と存ぜられ候。保勝会にて一刻も早く御差しとめできるもの候や、お願い申上候。

裏面には、

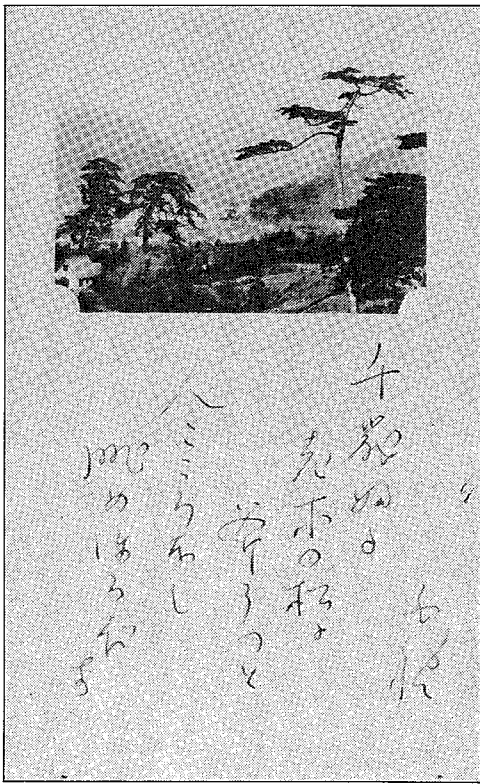
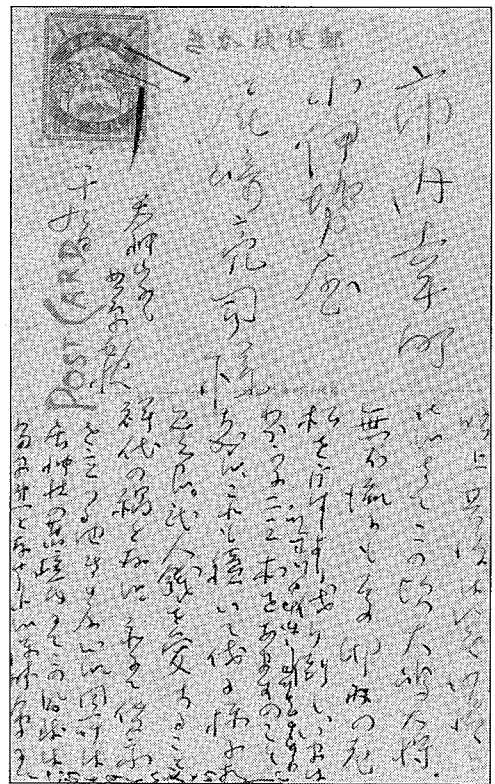
千歳ふる
老木の松に
斧うつと
人こころなし
眺めほろぼす

と、ある。

葉書には、「二十九日 天神山にて」と、記しているだけで、年月がなく、また、消印もないので年月は特定は出来ないが、天神山に移ってからのことであるのは、はっきりしている。

白秋が、十字四丁目の通称お花畑(小田原市南町三丁目五番二号)から、天神山の伝蔵寺の庫裏の別棟に移ったのは、大正七年(一九一八)十月のことなので、葉書を出したのは、これより以降のことになるが、この風致保護を言えるのも、生活のゆとりがあつて始めて出来ることだとすると、それは、白秋が永い間の貧窮な生活から抜け出た、大正九年から十年にかけての以後のことになる。

相手の大島義昌大将は、陸軍を退役して、余生を天神山の別荘(今の城山四自三番七号)で送るとはいえ、日清日露の戦功により、大将に昇進し、子爵を授けられ、閣下の尊称で呼ばれる身分の高い人である。大詩人白秋とはいえ、直接相手にも



の申せる時代ではなかった。そこで、白秋は、腹立たしさを一片の葉書に吐き出して、尾崎亮司に送ったのである。白秋は、大正九年、数人で発足した足柄史談会の最初の会合以来、彼と数回顔を合せており、

彼が、名勝や史蹟保存のために活動を続ける小田原保勝会の推進役であるのを知っていたからであろう。尾崎は、この葉書を受取って、どのように対応したか、残念ながら、その点は、分らない。(岡部忠夫)

明治以後小田原劇場物語(六)

石井富之助

三、演劇雑記

2 神静民報社の素人演劇コンクール

神奈川県教育委員会編の「社会教育十年の歩み」を見ると昭和二十一年に芸術教育の一環として学校演劇がとりあげられ、各学校に急速に広まったことが記されている。それと同じように社会教育の面においても、青年団あるいは職場における自主的な演劇活動が奨励され、自立劇団、市井劇が県下至るところに結成されて盛んな活動を開始した。

現在、小田原唯一の日刊新聞である神静民報は昭和二十一年二月の創刊で、当時は週刊であったが、この自立劇団運動に着目し、素人演劇コンクールを開催したことは、まことにすぐれた企画であったと言わなければならぬ。この企画が発表されると県下に異状な反響を喚び起こし、十月三十日の締切日までに左のとおり申込みがあった。

劇団新星(半原)鳥辺心中、

山雀会(箱根強羅)屋上の

狂人、印刷局(酒匂)自由

の嵐、東鉄大井機工部 還

る人々、こまどり楽団(秦

野)引揚船、若船座(厚木)

雪晴れ、こゆるぎ劇団(小

田原)未定、猿友会(鎌倉)

美しき門出、由井浜青年団

(鎌倉)引揚船、腰越青年

団(鎌倉)父帰る

予選は十月十七日、小田原城

内小学校の講堂で行なわれたが、

山雀会が不参加のため十劇団の

熱演が展開され、その中六劇団

がパスしたのだった。

この時欠場した強羅の山雀会

が左右に開かれると、廊下が舞

台になっていて、そこで小山内

薫の「息子」が演じられた。な

かなかの熱演で予選パスには問

題のない出来栄であった。

このようにして予選をパスし

た七劇団ならびにさらに後に追

加された一劇団は次のとおり正

式に発表された。

地方演劇コンクール

秋季大会プログラム

第一部(正午開演)

1 明るい首途(一幕二場)

鎌倉、猿友会演劇研究部

2 自由の嵐(一幕二場)

国府津、印刷局酒匂工場

3 息子(一幕)

箱根、山雀会演劇部

4 美しい真実(一幕)

小田原、こゆるぎアンサ

ンプル

第二部(十七時開演)

1 雪晴れ(一幕四場)

藤沢、日本精工新屋座

2 琵琶歌三蔵の巻(一幕一場)

久野、青年団文化部

3 引揚船(一幕二場)

秦野、煙草専売局鳥楽

劇団

4 鳥辺山(一幕二場)

半原、劇団新星

そして、審査員は北条秀司、

八田元夫、森律子、夏川大二郎

の四氏と発表された。

十一月八日、コンクールは御

幸座の舞台において繰りひろげ

られることになった。

各劇団ともにまことに意気盛

んで、応援団まで繰り込んで来

る始末、殊に半原青年団はトラッ

ク二台に大道具、衣裳を積み込

み、応援団も分乗してくるとい

う風で大変な人気であった。

開演前に北条氏始め各審査員

から地元審査員が要望された

いうことでわたしが選ばれた。

その任でないと再三断ったが、

是非ということなので、それで

はオブザーバーということなら

と二階正面の審査員席に列座し

たが、正午から始って夜中の十

二時終演まで、各劇団の熱演を

観させられるのには閉口してし

まった。クタクタに疲れ果てた

身体をひきずって東亜ホテルの

三階に行き、審査を終了したの

は午前二時であった。結果は次

のとおりであった。

決勝 新 星 座 「雪晴れ」

次席 半原劇団新星 「鳥辺山」

「雪晴れ」については各審査

員一致の推賞で、殊に八田元夫

氏は第一幕などは自分の新協劇

団よりもうまいと激賞した。

「鳥辺山」は織物はお手のもの

の半原だけにその衣裳の豪華さ

は歌舞伎座のそれをしのぐもの

があり、お染の演技は当り役で

ある松高と比べて別種の趣を出

し、すぐれていたという評であっ

た。

かくしてコンクールは大成功

裏に終了したのであるが、終戦

直後の昭和二十一年にこのよう

な演劇運動が展開されたことは、

最早ほとんど忘れ去られている。

一つの記録としてとどめておく

次第である。

3 県内劇場ごぼれ記録

「はしがき」のところで紹介

した「桐座記録」の中には、横

浜をはじめとして県下各地なら

びに伊豆、静岡辺までの劇場に

関する断片的記録がある。何か

の参考となると考えられるので、

それらについて記すこととした。

まず「桐座記録」の編者中川

金太郎、初太郎父子であるが、

中川金太郎は東京浅草田原町に

生れ、小僧の時から横浜福富町

の大道員山岸慶造の弟子になっ

て修業した。兄弟子は三人いて、

一弟子は横浜の筒井国蔵、二弟

子は不明、三弟子は横須賀の伊

藤保五郎であった。金太郎は二

十二才の時、これも同じ道具方

であった小田原の鶴村斎藤作右

衛門の仲人で小田原千度小路の

渡辺ミネと結婚し、初太郎は明

治十三年その長男として生れた。

金太郎、初太郎ともに桐座、鶴

座、富貴座、御幸座の大道具方

を引き続き勤めた。

中川父子のことを書いたたい

でだから大道具小道具その他に

ついて記しておく。

「桐座記録」の中に大道具員

方として出てくる者は前記の外

に

に

に

に、小池政吉、田口増太郎、渡
辺寅吉、瀬川鉄之助、瀬川庄太
郎、フウセン定(横浜)、宮内
国蔵、大清、佐野米吉、宇東市
寿、横山市松、安兵衛(横浜)、
小高勝次郎、若林房吉、佐野米
吉、石井大次郎、瀬戸琴次(小
山)、小川留吉高、橋金太郎、
土屋新太郎、柏木伝蔵、等の名
が見える。これらの人々はそれ
ぞれその所属の劇場を受け持つ
ているのだが、これについては
残念ながら分明でない。ただ一
つだけわかることは、ちょっと
大芝居になって手が足りないとい
う時になると、お互いに助け
合うという仕組みになっていたら
しいこと、さらに左団次である
とか菊五郎であるとか一流俳優
の一座の場には東京の仲間を頼
んでいることである。

さて記録の中から臬下ならば

に静岡県の劇場に関するものを
次々に拾って行ってみよう。
まず、明治二十九年には

中川初太郎十七才、此年
一月より七月迄大道具修
繕、横浜衣座主石川さん
専務大口金太郎、大口新
太郎、大道具頭筒井国蔵、
部屋頭木村留吉

五代目菊五郎一座打上げ
後、山口定雄一座、狂言
は元祖電気応用中幕娘道
成寺、大当り十二日間打
上げ、新派大同団(金泉
丑五郎、佐藤歳三、青木
仙八郎、静岡小二郎、佐
藤幾之助、亀井鉄骨、小
島文衛)で仮名手本忠臣
蔵、皆々一心の技芸大好
評二十日間打上げ、続け
て伊井容峯一座、伊井容
峯(牛若丸、清姫)福島

川柳

高井喜雄

勇退の賞状かざる通夜の壁

住職の俗な話題に座がほぐれ

性格の不一致ゆえに飽きもせず

立志伝出でて二次会幕となり

仲人は出来もせぬよな訓示をし

清(せんどう) 本田小一郎
(熊坂長範) で、牛若丸、
夏小袖、横浜初御目見得旧
劇牛若丸、清姫大人気、十
二日間にて上京、市川重五
郎一座(嵐鱗花、坂東新五
郎、紀伊国屋源之助、坂東
秀次郎) 桃太郎一代記、二
度主取三度仇討

以上は羽衣座の記事で、同座
は、午前八時開場午後六時閉場
している。
これに対し、港座は芝翫、又
三郎、訥升、福助を迎えて「関
の罪」を出し、伊勢崎町の鳶座
は小供芝居で中村吉右衛門、助
高屋高助で塩原多助、水滸伝で
對抗している。
また「両国家後に両国座改め
其後喜楽座、開場式、水野好美、
静岡小一郎、小島文衛」という
記事があり、さらに二十九年の
横浜各座の名称を左のとおり挙
げている。

萬座(伊勢佐木町) 港座
(関外) 勇座(伊勢佐木町)
賑座(同) 羽衣座(羽衣町)
玉のり両国家(伊勢佐木町)
同喜久廻家(同) 寿亭(吉
田橋側)

明治三十年のころには、

横須賀山王町立花座、芸者

芝居、振付師市川紅車、大

滝町春若座改め海光座

この外、臬下の劇場名を記す
と、

山北座(山北) 秦野座(秦
野) 喜楽座(吉田島) 大正
二年、大磯座(大磯)
さらに静岡県へ入ると、

堀内座(三島) 熱海座(熱
海) 伊東座(伊東) 大仁座
(大仁) 江尻座(江尻) 千
鳥座(静岡) 千茂登座(沼
津)

等の名が見え、これらの劇場
には前記大道具方がしばしば出
かけている。

これらのことを見ているうち
にわたしはふと神奈川中部以
西と静岡までの地域一帯が、旅
役者一座の巡業圏を形成してい
るのではないかと思つた。そし
て、その推測は「桐座記録」の
中の次の巡業記によって一層強
められた。それは明治三十五年
一月、足柄上郡吉田島の喜楽座
で松本錦升、中島伝幸、坂東舞
鶴、市川団之助一座が「時今天
下知旗梗旗揚」 「神靈矢口渡」
を興行した記録の、そのあとに
記されているもので、なかなか
面白いので原文をそのまま引用
しよう。

十月より田中一郎太夫元衣
裳かつら妻さだ持参伊豆西
海岸巡業、小田原より中島
伝幸、坂東舞鶴、中島伝作、
小山より浅尾国十郎、中村
芝尾、太夫竹本勢喜太夫、
三味線鶴沢小文治、大道具
中川初太郎外二十名一座、

其当時御殿場沼沢(原文ノ
ママ沼津駅であろう) 舟に
て松崎港着、松崎座主菓子
屋開場、初二日三日目不
入の為夜食朝食止り一同腹
ぺこ、田中太夫元は先乗り
不明、〇なく荷物人間為替
質、沼津舟宿七日間滞在、
漸く焼津へ行く事になり、
焼津座五日間興行悪しく、
金はもらはず後は御殿場座
へ戻り道故乗込の処、前借
金へ上乗り、衣裳へ二百五
十円荷為替運送店に止り、
如何致様なく御殿場町の旅
館えび喜方衣裳かつら借り、
十一月御殿場えびすこ祝い
芝居五日間一同かいさんば
ら、小田原へ漸く帰りが大
なりました。

意味のよくわからないところ
があるが、小田原を本拠とする
中島伝幸、坂東舞と静岡小山
町の浅尾国十郎とで旅廻り一座
を作り、伊豆松崎から焼津、御
殿場とまわった御難続きの旅芝
居の様子がうかがわれて面白い。
この記録から推察できること
は、小田原に在住する役者が旅
廻りに出る場合、その行動範囲
は臬下一円、静岡県へ足を踏み
入れたとしてもせいぜい静岡ま
まであったと思われることで、
この程度の範囲ならたとえ一文
なしになっても故郷へ辿りつく
ことができるはずである。

「桐座記録」の中に静岡までの劇場名が記載されていること、それら劇場間に大道具方などの相互援助があったらしいこと、この旅廻りの行動範囲等を思い合わせると、巡業圏に対するわたしの考えが当たっているように思えるのである。

このことをある映画館の経営者に話したところ、その人は巡業圏というものは確かにあり「わたしは沼津ぐらゐまでだと思っていたら、なるほど静岡ま

ですか」と言った。

「横浜の演劇」については先年故木村錦花氏が神奈川県文化財調査報告書に発表されているが、その他の県下各地の演劇あるいは劇場についてはほとんど知られていないので、断面的ではあるが、ここに記した次第である。

むすび

演劇史、劇場史の研究はほとんど、東京、京阪などの大都会に集中していて、地方における

大正・昭和と

著名な文人と交遊のあった

小田原御幸浜・養生館主

西村隆一氏に聞く(三)

交友のあった文人たち

「それでねえ、雑誌を出したことがあるんです。

昭和二年五月、私が二十五歳のときですね。発行所を東京の本郷西方町十番地において、主幹が私の訳です。

『光と文芸』という題でして写真を中心に、上に写真か絵を入れて、その下に各文士の詩とか文章を入れたり、そういう体裁の雑誌ですね。今じゃ珍らしくないですが、その当時は

珍らしいといわれました。ところが、二号迄出して潰れちゃって……。『二号雑誌』までいかなかったです。それで、

原稿は、こういう方が皆下すった。内容としては、相当なものでした」

確かに、北原白秋、中条百合子、河野桐谷、今東光ら著名な人達が名を連ねている。そのうち、中条(のちの宮本)百合子と河野桐谷は、先号に記したが、西村隆一氏の親戚に当る。桐谷

ものは極めて少ない。これにはいろいろな理由があるであろう。第一に一流俳優の芝居などあまり上演されない地方の演劇のことなどが、いわゆる演劇史の面から見れば大した価値を持つていないことは当然なことである。また郷土研究家にしてもたかが芝居のような遊ぶ事よりもっと大事な研究があるということ、この方面にはあまり眼を向けられないのが普通である。たまたまそういう好事家がいたとしても、旅廻り芝居ばかり上演しているような田舎劇場に、その記

は、東京生れだが、一時、小田原に住んだことがあり、劇作家、美術評論家として知られていた。中原綾子は、歌人で与謝野鉄幹の弟子、同じく西村氏の親戚である。

西村氏は語るに『二号雑誌』と、創刊してから、三号ぐらいで休・廃刊に追い込まれる雑誌をあざける語を使われたが、以上のように、親戚に文芸に優れた人たちがいれば、自ら文学に関心が引き寄せられるのは、当然で、また、それは血筋というものだろう。それに白秋が仲人である。さらに加えて、小田原の風土が……。西村さんは、数多くはないが、童謡を作詞しており、それがラジオ放送されたこともある。

録などあるはずもない。こんなことが重なっているからであると思われる。

しかし、われわれの生活の中で娯楽が重要な部分を占めるものであることはいうまでもなく、劇場や映画館が市民生活にいかにかかわりを持ち、いかにか大きな役割を果たしてきたか、

生活史、文化史の面から見れば、この方面の研究もまたゆるがせには出来ないと思えるのである。幸い小田原には最初に記したごとく僅かではあるが記録が残されており、またわたし自身、先輩の間書もいくらかとつておいたので、ここにこれらをまとめて見たわけである。(了)

西村隆一氏に聞く(三) 交友のあった文人たち	
西村隆一	西村隆一
西村隆二	西村隆二
西村隆三	西村隆三
西村隆四	西村隆四
西村隆五	西村隆五
西村隆六	西村隆六
西村隆七	西村隆七
西村隆八	西村隆八
西村隆九	西村隆九
西村隆十	西村隆十
西村隆十一	西村隆十一
西村隆十二	西村隆十二
西村隆十三	西村隆十三
西村隆十四	西村隆十四
西村隆十五	西村隆十五
西村隆十六	西村隆十六
西村隆十七	西村隆十七
西村隆十八	西村隆十八
西村隆十九	西村隆十九
西村隆二十	西村隆二十
西村隆二十一	西村隆二十一
西村隆二十二	西村隆二十二
西村隆二十三	西村隆二十三
西村隆二十四	西村隆二十四
西村隆二十五	西村隆二十五
西村隆二十六	西村隆二十六
西村隆二十七	西村隆二十七
西村隆二十八	西村隆二十八
西村隆二十九	西村隆二十九
西村隆三十	西村隆三十
西村隆三十一	西村隆三十一
西村隆三十二	西村隆三十二
西村隆三十三	西村隆三十三
西村隆三十四	西村隆三十四
西村隆三十五	西村隆三十五
西村隆三十六	西村隆三十六
西村隆三十七	西村隆三十七
西村隆三十八	西村隆三十八
西村隆三十九	西村隆三十九
西村隆四十	西村隆四十
西村隆四十一	西村隆四十一
西村隆四十二	西村隆四十二
西村隆四十三	西村隆四十三
西村隆四十四	西村隆四十四
西村隆四十五	西村隆四十五
西村隆四十六	西村隆四十六
西村隆四十七	西村隆四十七
西村隆四十八	西村隆四十八
西村隆四十九	西村隆四十九
西村隆五十	西村隆五十
西村隆五十一	西村隆五十一
西村隆五十二	西村隆五十二
西村隆五十三	西村隆五十三
西村隆五十四	西村隆五十四
西村隆五十五	西村隆五十五
西村隆五十六	西村隆五十六
西村隆五十七	西村隆五十七
西村隆五十八	西村隆五十八
西村隆五十九	西村隆五十九
西村隆六十	西村隆六十
西村隆六十一	西村隆六十一
西村隆六十二	西村隆六十二
西村隆六十三	西村隆六十三
西村隆六十四	西村隆六十四
西村隆六十五	西村隆六十五
西村隆六十六	西村隆六十六
西村隆六十七	西村隆六十七
西村隆六十八	西村隆六十八
西村隆六十九	西村隆六十九
西村隆七十	西村隆七十
西村隆七十一	西村隆七十一
西村隆七十二	西村隆七十二
西村隆七十三	西村隆七十三
西村隆七十四	西村隆七十四
西村隆七十五	西村隆七十五
西村隆七十六	西村隆七十六
西村隆七十七	西村隆七十七
西村隆七十八	西村隆七十八
西村隆七十九	西村隆七十九
西村隆八十	西村隆八十
西村隆八十一	西村隆八十一
西村隆八十二	西村隆八十二
西村隆八十三	西村隆八十三
西村隆八十四	西村隆八十四
西村隆八十五	西村隆八十五
西村隆八十六	西村隆八十六
西村隆八十七	西村隆八十七
西村隆八十八	西村隆八十八
西村隆八十九	西村隆八十九
西村隆九十	西村隆九十
西村隆九十一	西村隆九十一
西村隆九十二	西村隆九十二
西村隆九十三	西村隆九十三
西村隆九十四	西村隆九十四
西村隆九十五	西村隆九十五
西村隆九十六	西村隆九十六
西村隆九十七	西村隆九十七
西村隆九十八	西村隆九十八
西村隆九十九	西村隆九十九
西村隆百	西村隆百

なお、北原白秋が『光と文芸』創刊号に寄せた童謡「もとゐたお家」は、この雑誌のために書いたものである。この童謡は、天神山の木兎の家を追憶したものであろう。

もとゐたお家
もとゐたお家
丘のうえ

草もぼうぼうのびました
誰もあぬぬに
目のやうな

壊れ硝子が光ります
もとゐたお家
僕ひとり

けふものぞきに来て見たら
黒いひまわり
花ななつ

雀下向き、つゝ、いてる

――そうすると、西村さんは

若い頃、文学青年でしたか。

「ええ、そうなんです。私が東京にたまたま出かけたとき、本郷に行くのと、丁度、今東光と出会ったですよ。彼が、まだ若い時分です。そして、そこに、文芸人が多く集まっています。そこへ私が入り込んで、一緒になつて話をしたり、騒いだりして――」。

そんな関係があるもんですから友達のようにしていましたが、今東光は、その後、私の出した雑誌や、詩歌の会のために協力してくれました――。

それで、小田原にやって来ると、十字町西海子の谷崎潤一郎の家(今の南町三二一―二〇)に泊ったんですが、海岸によく遊びに来ました。私は、今ちゃん、今日はなに?というとき、今日は散歩だ、なんて返事して……。

日活の女優を伴ってやって来ましたが、

日活の女優を伴ってやって来ましたが、

思われるが、ついでに記すと、谷崎は、小田原に二度同じ場所に住んだといわれる。最初は大正二年(一九一三)前後、二度目は大正八年十二月から十年九月迄の間である、と。最初に小田原にいた期間は、はっきりしないが、潤一郎の弟精二が、大正二年七月、早川の某旅館に滞在中の潤一郎を訪れている(集英社『谷崎潤一郎』)。

今東光は、少年時代無類の喧嘩好きで、そのため中学を二校をも退学させられており、その後、放浪な文学青年の生活に入るが、西村さんが今東光と知り合うのは、その時期で、大正九年前後のことであろうか。今は明治三十一年(一九一六)の生れ、西村さんは、明治三十五年の生れで、年齢差もなく、同席の文学青年らとの談論風発、さぞ賑やかなものであったろう。

今東光が小田原に遊びに来た時期について、西村さんは、はっきりした年月を記憶していないが、今が谷崎の家に泊った時期は、大まかではあるが分る。そこまで探求するのは、単にゴシップ的なものであまり意味ないと

思われるが、ついでに記すと、谷崎は、小田原に二度同じ場所に住んだといわれる。最初は大正二年(一九一三)前後、二度目は大正八年十二月から十年九月迄の間である、と。最初に小田原にいた期間は、はっきりしないが、潤一郎の弟精二が、大正二年七月、早川の某旅館に滞在中の潤一郎を訪れている(集英社『谷崎潤一郎』)。

もともと、今東光が谷崎の家に泊ったとすると、それは、今東光や西村さんの年齢からして、大正八年から十年の間になり、今東光は二十一、三歳、西村さんが十八、九歳の頃の話となる。

――西村さんが雑誌を発行されたのは、学生だった頃ですか? 「いや……。前に申しあげましたように、親爺が死んで、二年の時、小田原中学を中退しまし

たが、……。それから、また勉強する気になりまして。……」

法政の仏文科にいったでしょ。そしたら、おふくろにえらく怒られてしまってますね。お前学校の先生になる気かと言われて――。

それで、途中、二年から法科に転科したんですけど。――そうしたところ、大正十二年の大地震でしょ、法政をやめたんです。それも、ちょっとした経緯があつて。――震災でみんな家は潰れちゃったでしょ。それで、私が先頭に立ちまして、法政大学と交渉したんですよ。震災地の子弟は、全部授業料を免除してくれと。

ところが、どうしても、大学側は言うことを聞いてくれない。それで、どうしても聞いてくれないから困る、と言うと、生徒監の為光と野上の両先生が折れましてね、半額にしようといつたのです。

たが、……。それから、また勉強する気になりまして。……」

法政の仏文科にいったでしょ。そしたら、おふくろにえらく怒られてしまってますね。お前学校の先生になる気かと言われて――。

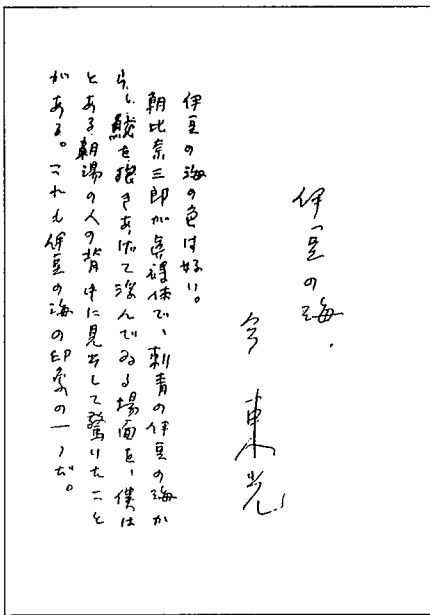
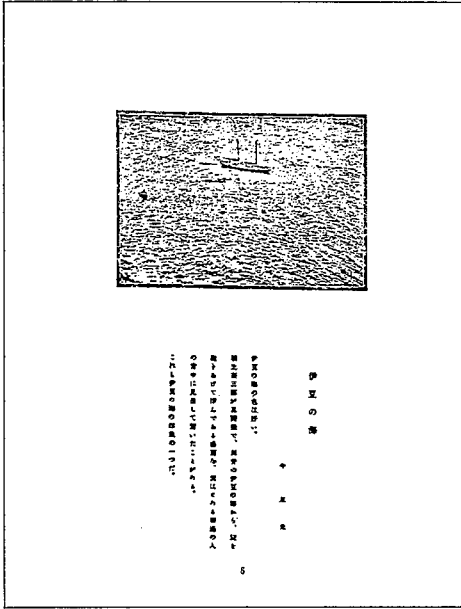
それで、途中、二年から法科に転科したんですけど。――そうしたところ、大正十二年の大地震でしょ、法政をやめたんです。それも、ちょっとした経緯があつて。――震災でみんな家は潰れちゃったでしょ。それで、私が先頭に立ちまして、法政大学と交渉したんですよ。震災地の子弟は、全部授業料を免除してくれと。

ところが、どうしても、大学側は言うことを聞いてくれない。それで、どうしても聞いてくれないから困る、と言うと、生徒監の為光と野上の両先生が折れましてね、半額にしようといつたのです。

たが、……。それから、また勉強する気になりまして。……」

法政の仏文科にいったでしょ。そしたら、おふくろにえらく怒られてしまってますね。お前学校の先生になる気かと言われて――。

それで、途中、二年から法科に転科したんですけど。――そうしたところ、大正十二年の大地震でしょ、法政をやめたんです。それも、ちょっとした経緯があつて。――震災でみんな家は潰れちゃったでしょ。それで、私が先頭に立ちまして、法政大学と交渉したんですよ。震災地の子弟は、全部授業料を免除してくれと。



(岡部忠夫)

少年の頃の思い出話

相澤 栄 一

大正三年(一九一四)、第一次世界大戦が勃発し、日本も参戦して、南洋諸島のドイツ領を占領しました。

その頃私は、小学校の三年生でした。

お城の濠端で、蜻蛉(とんぼ)とりをするために、何時も、仲間と大工町まで「もち」

を買いに行くのでした。鐘つき堂の横に弁護士、平川松太郎氏の家があって、其

処から三の丸の土塁の西寄りの小路を通って、御用所の松の生垣で囲まれた、川

添、渡辺、牧野、の土族屋敷の前から、当時、土塁の東側だけにあった、小沢病院の裏に出て、土塁の東寄

りの畦道を歩いたのでした。右側に綺麗な水が、せせら

いていた。土塁は、うつ蒼とした樹木で、その道は薄暗かった。

つき当りが銭湯の松の湯の裏で(今の小田原郵便局)、

三の丸の谷津口門の土塁から幸田門の土塁の外側に添って来る流水が、其処で、林

学の町並を東西に流れる大きな水路に入っていた。そ

の松の湯の反対側の角に、生華堂と言う、毛筆を製造して居る店があって、三、

四人の職人が筆を造っていた。私達は何時もその店に立ち止まって、物珍らしげ

に目を見はるのでした。まだ小田原駅もない時代

だったので、松の湯の先隣りは相馬屋敷の広い草原で、

下幸田に通ずる細い道があっただけでした。今の清水小

間物店の処に雑貨屋があって、其処の婆さんが店の隣で焼芋屋をやっていた。

林学の川沿の道筋に、緑庵と言うそばや、八百屋、菓子屋、等もあった。川に掛

当時の大工町には、まだ古い町並があった。手代町に曲がる角に、今でもある老舗の綿亀さん、その先に私達の目指す、内亀と言う間口の広い荒物、雑貨の老舗がありました。

何時も店先に居る、小猫のような顔をした、婆さんに、「もち」をくれと言つて、後について、店の中の土間を通して裏に出て、堀

抜井戸から冷たい清水のよう

な水が勢いよく流れて居る井戸端で、手に握って来た、二、三銭の銅貨を渡す

と、婆さんは冷水に浸って居る桶から、手ぎわよく「もち」を摘んで、割箸の

先だんだんご状にまるめてくれた。それを大事に片手に

持って、生華堂の裏まで来ると、土塁の下の流に乾いた「もち」を浸すのでした。

家に帰って、蜻蛉用になつて居る、釣竿の細い先に、指に水をつけながら「もち」

を巻つけて、濠の端に立って、蜻蛉を待つのでした。長い濠の石垣に沿って、く

り返し飛んで来る蜻蛉を、竿を上下左右に小さく振って、捕えるのでした。灰色のシオヤや赤蜻蛉も来まし

たが、私達の狙って居るのは、黒い大きな体に黄色の縞模様をついた、トラヤでした。そのメスを捕えると、羽根の間に一米位の木綿糸

を結びつけて、飛ばせながら、オスのトラヤを、つるませて捕えたりもした。

(编者註) もちモチノキの樹皮を水に漬し、つき碎き、煮て作った粘り強いもの。鳥

や虫などを捕えるのに用いる。私達が赤蛙を捕へるために、池の中を飛びまわった、

城址の北側にあった弁天さんの池も、また古びた小社も、小橋も、大正末期までは、

まだそのままでした。後に市長となつた、益田信世氏が

弁天さんの跡を埋立てて、作って、日本スポーツマン・

クラブのテニス・コートにしてしまつた。弁天さんは跡

形もなく変貌して、テニス・コートからはボールを打つ

軽快な音が、こだましていた。だがその後、益田氏の没落で、作業小屋

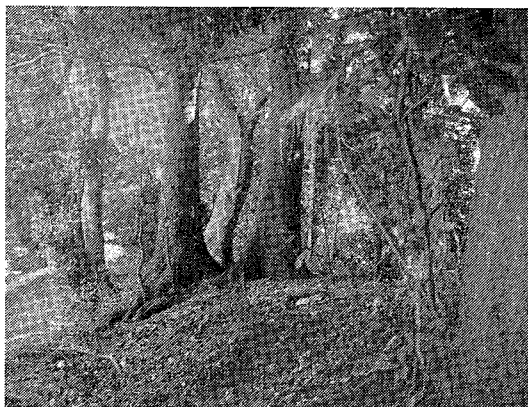
跡と、土族の加藤淳さんの屋敷とを合せた、広い邸宅も分譲地化され、また日本スポーツマン・クラブの立派なテニス・コートも

転変して今は商工会議所と、日本タバコ、になっている。明治、大正期の三井の大

番頭、益田孝氏の妾腹の子として、甘えの構造の中で

育ち、激動期を派手に、奔放に、生きて、波乱万丈の生涯をおくられた、益田氏

だった。彼の生き方も、あの時代の一つの典型で、あつたかも知れないが空しさが感ぜられてならない。



小田原郵便局裏の土塁跡

静高の帽子

— 畏友間中喜雄君を惜しんで —

杉山 長 風

中学四年の昭和二年二月十五日の事である。

五年生は二月十一日紀元節以降、卒業式までは主として自宅学習であるから、四年生は羽根を伸ばせる最上級生の身の上となるのである。

この日、私は前年六月、急性盲腸炎で倒れた兄舜一の遺品である、静岡高等学校の帽子を風呂敷に包んで登校した。

朝礼前のひと時、やおら包からこの帽子を取り出し、これを被って中庭から廊下を、これ見よがしとばかり意気揚々、闊歩して友を驚かせていた。

その時、突如、大喝一聲。見やれば、何と、本校随一の鬼門の大金神本官(生徒教育主任 添田豊太郎先生)である。

大それた服装違反、人を欺く悪行為とばかりの大叱責。あれよ、あれよの級友の声を後にして、私は屠殺場に曳かれてゆく小羊さながら連れられて行くのであった。

校長室か、職員室か、と思っただが小使室であった。

「ここに立っておれ」の一言をいい置いて立ち去られた。朝礼が始まるからである。

かくして小使室に塾居閉門。おかげで、とうとう午前中の授業は欠席。

昼休み時間となる。

突如、小使室前で幾人かの生徒と、何やら本官との話し声がした。ややあって本官小使室に来られ、

「分かったか。よろしい。帰れ」と極めて簡潔。放免である。第五時限には出た。

われらの友は、「やっとな、やっとな」「いいぞ、いいぞ」と一種の褒め方をしてくれるのである。だが、生きていけるそらなかつた。

授業終了、
「やあ、やあ、やっとな、やっとな」と皆に挨拶して、そそくさと

家へ帰った。母は、何となく私の顔の冴えていないと見てとって「どうしたのか」と、心配気に尋ねるのであるが、「何だか、今日は気持が悪い」といって、奥に引き籠り机に向った。

だが、何となく落ち付かない。△現級留置かそれとも無期停学か▽ただただその後の処罰がどうなるか不安なのである。

すると、その日の午後三時半頃である。家の門の所で自転車が止まった。自転車を降りて誰か来た。

「おばさん、おばさん、杉山君いますか」と。聞きなれた声。正しく間中の声だ。「帰っているけれど、気分悪い」といって奥に引きこんでいるが、

学校で何かあったでしょう」といふような母の小声がした。

すると間中は、

「おばさん、大した事ではないが、とんでもない事をして叱られた」

と、ちぐはぐな事をいうのである。

母は、心配しいい間中を連れて部屋にやって来た。彼はさつきいのである。

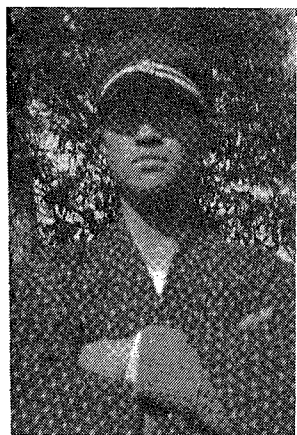
「心配しているのか。何も心配することないよ。俺が本官に謝ってる、貰い下げをしたのだ。もしもの事があったら、俺が責任をもって本官に談判するから」と

と当てるのか、ならないのか、とにかく自信たっぷりといって笑わせた。母も安心し、

「よかった、よかったね。すまなかったね」といいながら話の仲間に加わった。

そして、詳しく間中から昼休みの本官との話しあいの内容を聞き、私からは静高の帽子のいわれを話したりした。

帽子は、兄が大正十四年、静高に合格した際に買い求めたものだが、兄は外交官になるには何も高校、帝大のコースを選ばなくても、修業年限が二年間



静高の帽子をかぶった筆者

短い東京外語を選んだ。

「ところで」といって間中はひと息ついて、

「その帽子を俺にくれないか。君としても手放すのは惜しいだろうが、今日の記念に貰いたいのだ。俺がわざわざ写真機を持って来たのは、その帽子を被った天晴な君の写真を撮ってだから、その帽子を貰って行くのだ。俺は来年静高に入学するのだから」といふのである。

そこで、日の西に傾いた庭に出で、あれこれポーズを取らせては写真を撮ってくれた。部屋に戻ってから暫く楽しく共に将来を語りあい、帽子の授受式をすませた。そして彼は勇んで帰った。

× × ×

五年生になるや、学校では稀に見る秀才間中に一高受験をしきりに勧めたようではあるが、彼は頑として聞き入れず、静高受験を頑張った。

それを聞いて私も「一高に行けよ」



ある日の間中喜雄氏 左側は佐藤大観

「いや記念の帽子がある。俺の
 静高入学の準備は完了である」
 というのであった。
 かくして間中の静高一辺倒の
 決意は、いや原因は、校長も知

らない。教頭も主任の先生も知
 らない。友の皆も知らない。知
 るのは長風私のみ。ああ。
 静高の帽子の罪と立たされし小
 使室に今は師と語る
 (長風中学五年三月の拙歌)

P W ドクター ー 沖繩捕虜記

Se non è vero è ben trovato

(うそにしても面白い話だ)

ハイタリア俗諺

第I章 終 戦

いかなる事件も、どれがどん
 な性質のものであるかと、だ
 れかを笑わせることができる。

〈マルセル・パニョール〉

戦争が負け戦だということには、
 だんだんはつきりしてきた。し
 かし、どう敗けるのか、敗けた
 らどういうことになるのかとい
 うことはだれにも判らない。
 たぶんひどい目にあわされる
 ことだろうという漠然とした予
 感は、口には出さないがだれ
 の胸にもあった。一億玉碎と勇
 ましい号令が中央からきこえて
 くるが、一度に殺してもらえら
 のか、鬮り殺しにされるのか、
 その辺のところはよく判らない。
 こういう不安な日が続いたあ

げく……。

間中喜雄

私、すなわち、陸軍軍医中尉、
 新納仁のぞくする豊部隊ごと、
 山砲兵第二八連隊は、九州の西
 南、沖縄の一孤島であるM島で、
 悲喜こもごも終戦の日をむかえ
 たのであった。

著 書

- 『PWドクター<沖繩捕虜記>』(金剛社刊) 『ちぐあん随筆そればんのむだ王』『かっぱ随筆霊界からの手紙』『かっぱ随筆針・灸・漢方』『医家のための針術入門講座』『針灸臨床辞典』(以上医道の日本社刊)
- 『むらてらー医者と患者』『肩凝りと腰痛』『針灸の理論と考え方』(以上大阪創元社) 『針と灸』『中国式あんま』『Chinese Massage』『耳針のすべて』(以上主婦之友社刊) 『医学は人を救っているか』(朝日新聞社刊) 『病気の自己判断の手引き』(久保書店刊) 『お灸の研究』(ごま書房刊)
- 『近代針術』中文(人民衛生出版社刊) 『灸穴治療法』中文(台湾出版社) 『L' acupuncture a vol d'oiseau』仏文(General printing Co.刊) 『Layman's Guide to acupunture』英文(Weather hill Inc.刊) 『Chaising the Dragon's Tail』英文(Redwing Book Co.刊)

そ の 他

学会発表及び海外講演(バリー、マドリード、カイロ、バンドン、ニューヨーク、ボストン、サンフランシスコ、ポトランド、デトロイト、シカゴ、ハワイ、カナダ、ブラジル、メキシコ、ウルグアイ、アルゼンチン、中国、香港、フィリピン、その他)。翻訳書(英、仏、仏、中→和)。研究論文、書評雑誌寄稿、等多数。

略 歴

- 明治44年4月23日・神奈川県小田原市に生れる。
- 昭和6年・静岡高等学校理乙卒業。
- 昭和10年・京都帝国大学医学部卒業。
- 同 年・東京順天堂病院外科勤務。
- 昭和11年・東京和泉橋慈善病院外科勤務。
- 昭和12年・小田原にて開業。間中外科医院(創立明治39年:初代院長間中直七郎)を継承する。
- 昭和15年
 ~21年・満州。沖縄にて軍務に服す。(陸軍軍医中尉)
- 昭和21年・復員。小田原にて医業活動を再開。
- 昭和25年・日本東洋医学会に参加。評議員に就任。
- 昭和26年・間中病院を個人立より医療法人(社団温知会)に改組。理事長。院長を兼任。
- 昭和27年・小田原市教育委員に選任。(1期4年)
- 昭和30年・京都大学医学部大学院入学。(生理学専攻)
- 昭和32年・「内臓体表部、体表部内臓反射に関する臨床的研究」で京都大学より医学博士の学位授与。
- 昭和32年・小田原医師会会長に就任。(1期2年)
- 昭和34年・国際針術学会(フランス)にて講演。
- 昭和41年・社団温知会を特定医療法人に改組。理事長に就任。
- 昭和35年
 ~45年・東洋針灸専門学校校長。
- 昭和47年・間中病院院長を退任。温知会理事長を専任。
- 昭和49年・北里研究所付属東洋医学総合研究所客員部長に就任。
- 昭和55年・(東洋医学の発展に貢献した功績に対し)
 日本医師会最高優功賞及び神奈川県医師会衛生功労賞を授与される。
- 同 年・世界総合医療学術会議総会(アムステルダム)にて講演。
- 昭和56年・日本東洋医学会第32回学術総会会頭を務める。
- 昭和57年・講談社「日本医科学大事典」に東洋医学の項を執筆。
- 昭和58年・小田原市功労賞(東洋医学の普及発展に貢献)を授与される。
- 昭和43年
 ~63年・針灸医学夏期講座(毎年開催)にて講師を務む。
- 平成元年11月20日・間中病院にて肝臓癌のため逝去。享年78才。

いう何にもまして喜ばしい希望が、尾篋骨の辺から背髄、脳へと湧きあがってきて、あたりに人がいなければ、ニタニタ・ゲタゲタ・ワッハッハと笑いにまで醗酵するほどであることは、将校にして將校でなく、兵隊でもない軍医の私が横目でまぎれもなく見てとったところである。

わが山砲二八連隊の連隊長、ガダルカナル生き残りの勇士、藤枝大佐は、終戦三日前の八月十二日、ソ連参戦の重大ニュースが伝わった日、將校一同を集めて連隊今後の使命を説いた。「いまやわれわれは、このM島に孤立した。まさに千早城にたてこもった楠正成と同じ状況で

ある。われわれは右顧左眈することは出来ない。この島において任務に邁進するのみである。本土が占領されればこの島が日本である。万日本が敗れるような、そんな邪が正に勝つようなことが起きるなら、われわれは生きている必要はない。枕を並べて切腹する。」
と烈烈火を吐く訓示である。

部隊一同、一瞬、シュンとなって息をのんだ。
その夕方、わたしは悲壮な決意をもって海岸に行き拳銃を試射してみた。この拳銃は、ドイツのルウガアに似て非なる重くて大きくて射ちにくい軍用九連発である。五年前東部一二部隊に入隊した時、われわれ召集軍

医は拳銃を持っていなかった。これは將校の軍装品で、本来自分で買うのを立て前とする。よんどころなければ、下士官用の官給品を借りるのであるが、このほうは連根のついた、見るからに無骨な旧式な奴で、撃った反動がものすごく、弾ほとんどない方向に飛んで行く。おどかしにはなっても殺人の役に立ちそうもない代物である。

歴戦の下士官は、
「あんなものは、戦場に行けばいくらでもあります……。」
と悪知恵をつけてくれたが、連隊本部に頼んで兵器廠から一金百円で買ってもらった。以来、暑いにつけ寒いにつけ、水筒、凶器、防毒面、軍刀、軍医携帯囊等ともに、弁慶の七ツ道具のように肩にめりこませて背負って歩いた武器である。ときどき手入れはしていたが、一度も撃って見たことがない。またこの拳銃にせよ、どの拳銃にもせよ、今まで拳銃というものをまったく撃ったことがない。これではいざという時に不覚をとるかも知れない。海岸には夕陽があかあかと落ちかかってあたりにも人もいない。左の人差し指で耳の穴をふさいで、沖をめぐ

てもう一度引き鉄を引いたが、「カチン」……………
もう一度やっても、「カチン」
もっているだけの弾を片っぱしから試してみたが、プスンともいわない。
連隊中の將校が並んで、「邪が正に勝つ世」に訣別する場面になつたら、私だけが、このやぐざな拳銃を頭にあてたまま生き残るという悲喜劇を演ずるところであった。

『P.W.ドクター(沖繩捕虜記)』を讀んで
以上、間中さん(敬愛をこめて「さん」づけで)の著書『P.W.ドクター(沖繩捕虜記)』(昭和三十七年刊)より、冒頭の一部を転載させて頂いたが、ユーモアーとペーソスを感じない訳にはいかない。
間中さんは、米軍占領時代であったなら、好ましくあらざる文章としてみ発禁になつたかもしれない、と「あとがき」で書いていられるが、発行日を八月十五日と、終戦の日を選んでいるのも戦死した者への鎮魂の意味をこめられたものであろう。

若くて死ぬ
美しき
人人の想出に
けがれない笑顔や
いきいきした動作や
爽やかな声だけが
いつまでも残っている。
夜明け
紫の雲を
日の最初の光が
緋色にそめる
あさぎの空に
目の醒めるような
美しさが
不思議な静寂さで
凝固している。

本書の核をなすのは、勿論、書名の通り、捕虜生活の見聞記で、冷静に、日本とアメリカの軍隊のあり方や、兵の行動を通して、その違いを見較べており、期せずして比較文化論(当時そのような言葉は用いられていなかったと思つた)的な内容を伴っており、しかも、それが堅い表現ではなく、ユーモラスな筆致で描かれていて、敗者として卑屈さが微塵もなく、讀んでいて楽しい。



「あとがき」の終りに、「沖繩で戦死した青年たちに」と、詩で、しめくくられている。
ともかく、プロ作家はだしの著作で、しかも、医療の劇務のあとで、綴られたとは、驚きの他はない。(南里 哲)

幕末、中島・本久寺に 住持された成貞尼について(五)

小野意雄

四 シーボルト事件

4 「かくまい」の構図

「かくまいの構図」は、家譜上と年齢上の操作の二つによってされています。まず「文」の場合は、「豊季室」としての明記がありません。「勤修寺貞顯女」あるいは、「随季母」として豊季の嗣子随季にかかわる為実子縁組み等々、関係公家の家譜に記載されるだけです。しかも随季は、菊亭尚季の二男とされており、尚季の側室とも誤読されかねない記載のされ方です。

「吉姫」の場合も、関係公家各家々の家譜上の操作による「かくまいの構図」が認められますが、最終的には、チャレンジ的に、大奥入りさせています。

まず第一に、菊亭家の家譜に「憲姫 母同公久」として、恰も尚季の室「保子」の本当の子のように、メーキングされます。「吉姫」は、呉氏の割註から逆算すると、文化十二(一八三三)年生ですが、「憲姫」の父にあたる尚季はすでに文化七年に没しているのです。つきに、「吉姫」は「憲姫」は清水谷実楯と為実子縁組みをして、「豊姫」になります。清水谷家譜によれば、豊姫は文化十年十一月生ですから、生年に二年の違いがあります。この二年の違いにメーキングの意味があると思われる訳です。いずれにしても幼くみせる必要があった訳です。こうして豊姫となった吉姫は、大奥入りし、徳川家上臈「瀧園」となります。

京都出生は、祖父「見季」の死んだ文政十二年八月十六日の直後になります。

「見季」の死の前年の八月十三日、甘露寺園長の実子になつて「輔季」が叙爵の榮に浴します。今後の小

倉家の相続に備えたのでしよう。他方、飛鳥井家ゆかりの不退堂聖純を僧籍から離脱・還俗させ、小倉豊季の実子とすることによって、まずは小倉家の存続をはかる一途としております。

これに先だつ文政十年正月五日、随季は「正四位下」叙せられ、次いで同年七月二十九日には「転右近衛権中將、同八月七日拜賀」の榮に浴しています。そして、この年、随季は家女房の「吉姫」と結婚し、「吉姫」は随季室になつていられると思われまふ。吉姫は、十五歳(十三歳はメーキング)になつています。

ところで文政十二年、京都を出立つるに先立ち、十七歳才の吉姫はみごもっておりました。吉姫の妊娠に気が付いたのは、大奥入りが決定してから後のことかも知れません。しかし、計画の変更はもはや、出来なかつたのでしよう。彼女は臨月近い身重の身体で、東下りの旅に出ることになります。当然のこと、彼女の妊娠は極秘事項だつたことではしよう。母体の保護・安全、そして護衛・機密保持、臨機応変の措置のためにも、成貞の付き添い、不退堂聖純の随行が必要があつた訳です。

同年九月二十八日箱根越え、小田原に入った豊姫(吉姫)は、小峰の近藤邸で「サダ女」を出産、後事を託して、江戸に向つたのでしよう。このことは、かねて打ち合せされていた予定の措置だつたかも知れません。サダ女の戸籍上の生年月日は、文政十三年(天保元年)九月十九日です。約一年遅らされ、かつ十日繰り上げられています。これも一つの仮構(メーキング)と思われまふ。そしてサダ女には、「母は、産後直ぐに死亡した。公卿の姫であるが、姓名不詳」と教えているのです。こうした説明を信じ、サダ女は「妙境院本室貞光大姉」を生母として菩提を弔っておりまふ。しかしサダ女は、自分の母のように世話になつた女人の名前として「清水谷のヨシ様」を伝えておりまふ。

豊姫一行が江戸に到着すると、成貞は何をおいてもまず、大久保忠貞に会つたことではしよう。「一」とわずかつたらず」で前述した「春鶯集」の文政十二年の詠草、また文政十三年の詠草は、忠貞と成貞の再会・打ち合せ・

交渉のなかから、詠まれたものでしよう。そうした過程のなかで、サダ女への出自説明も作られ、されていったのでしよう。

小倉家では、吉姫の妊娠・出産については、「男子だつたら……」「女子だつたら……」と、いろいろ思惑があつたことではしようが、女子だつたので、大久保家は養育することになつたのでしよう。そして障害となる問題の調整には、忠貞夫人「典」の実家の蜂須賀家、「典」の妹「光(寿美)」の嫁ぎ先である信濃松本藩の戸田光年、その本家の美濃大垣藩の戸田采女正氏庸等々があつたことではしよう。ちなみに忠貞室について戸田家とは「初願娶戸田采女正藤原氏教女之旨未娶而没」(神奈川県史資料編4近世(1)所載大久保氏系譜)の関係があります。氏教女とは、氏庸の妹雅姫(静鑑院)です。なお、ここに蜂須賀齊昌夫人并子は、鷹司政照の八女で、菊亭(鷹司)保子の姪です。保子の姉福子は、將軍家慶夫人浄観院の母にあたりまふ。

かれこれして、小倉家の相続は、天保五(一八三四)年まで保留され、輔季がすることになります。なお呉秀三氏の割註「吉姫 安政五年四十四歳にて死亡」説は、安政五年からの皇女和宮と降嫁交渉に際して、橋本家と小倉家との関係を有効に働かせる為でしよう、上臈名を瀧園から小倉に改めるに関連して、家譜上の措置をすることの適当性・必要性もあつたことから来ているものでしよう。

5 成貞と小倉家

一連の経過のなかから、シーボルトに会いたいと言いつたのは、随季の通婚中の妻の「房姫」ではなかつたかと思つたのです。菊亭家譜によれば、「房姫 尚季女母家女房」です。この家女房が「正姫 裕子 母家女房」で、成貞と指定されます。そして、正姫の母が、武者小路実純が通婚した妻で、生まれた女子は「正姫」として、菊亭家で育てられました。房姫の父は、菊亭尚季と思われまふが、甘露寺園長かも知れません。わが子「房姫」のひきおこした問題の責を負つた姿が、成貞の離京・東

下りであり、雑髪ではなかったのかと思うのです。

尼 そぎすてし その黒髪の子ちとはば

かなしきふしや とけ残るらむ

猿 渡 成章

忍恋 しられじと おしつづみていかせんに

こころのおくに 落ちるなみだを

成 貞 尼

「春鶯集 堀川初度百首題の中に」

忍恋 ことに出て いふより増る くるしさを

忍べと 袖に あまる涙か

忠 真

同時に、かつて「二條尼」が將軍更迭に係わる秘命を受けていたように、朝廷と幕府との関係で特別の秘命を受けていたのかも知れません。というのは彼女は光格天皇の「内ノ女房」新典侍「備子」として、宮廷に出仕していたと思われるからです。

飛鳥井家譜をみますと、雅威に「従五位下 女子 禁中奉仕称新典侍」があり、また「文化八年正月 女房次第」に「光格天皇 内ノ女房 飛鳥井雅威卿女 新典侍 備子(マサコ)二十二」記載があります。なお「天保五

所 感

川 瀬 鳳 山

(速雄)

夷風憎嗔叩「牆扉」

國政渾迷衆莽歎

時當改茲如意世

新情諦盡旦晨啼

平成庚午元旦

年正月 女房次第」には、備子の名前はありません。そこで、この家譜と昭和新修華族家系系を合わせ検討してみますと、雅威の子女達のうち、実清・農清・備子の三人は、雅威とは養子または為実子、あるいは備子の関係になるようです。すでに農清については、「おだわら歴史と文化1」で、不退堂聖純(寛政六年生)と措定したところでは、飛鳥井家では雅威の父雅重には、権典侍と蓮華院の二人の宮廷出仕の女子がおりましたが、雅威には適当な女子がなく、代々ということからすると、欠けてしまうこととなります。そこで近親の「正姫」を「猶子」として迎え入れたのでしょうか。

家譜によると備子は文化八(八二)年に廿二歳ですから、寛政二(二五)年生になります。他方、成貞の墓碑銘「安政六年、六十七才没」からすると、生年は寛政五年になり、両者の間には三年の違いがあります。つまり備子と成貞は、別人ということになります。しかし、備子のデータは一応公式資料ですが、成貞のデータは、成貞の話をもとにした小田原の関係者の記述という限界があります。三年の違いは、成貞の女心による許容範囲とすれば、成貞すなわち備子と措定することが出来ます。また成貞(正姫)の子「房姫」の推定生年は文化四(六〇)年です。この年、正姫を十五歳とみるより、十八歳とみた方が適当です。

ところで、ここにシーボルト事件に係わる年齢の調整・操作という観点からみますと、つぎのような整合性を検出することが出来ます。成貞の女心として済ますことは出来なくなりますが。

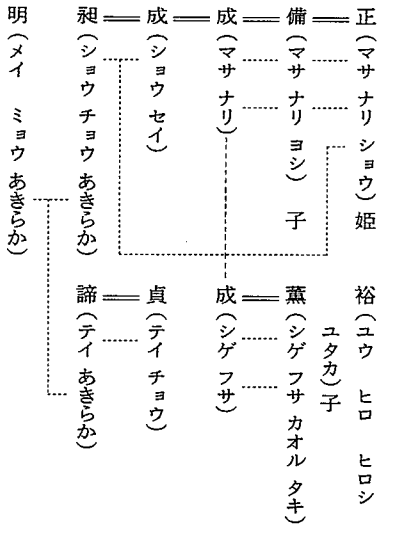
- 1 成貞の年齢を、三歳若くする。
- 2 吉姫の年齢を、二歳若くする。
- 3 サダ女の年齢を、一年遅らす。

成貞の歳を三歳若くすると文政十二年、彼女は三十七歳。サダ女の母とみせかけることが出来ます。更年期に入るかもしれない四十歳よりもよいでしょう。吉姫の歳を二歳若くすると文政九年、彼女は十二歳。十二歳と十四歳とでは、シーボルトについての関心につき、申し開きが出来ましょう。また文政十年、彼女は随季と結婚し

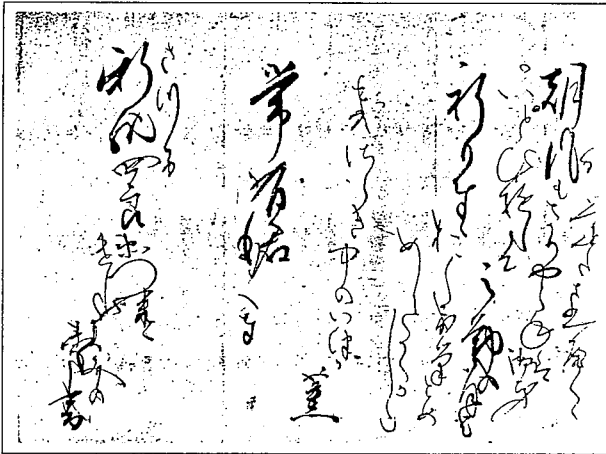
ておりますが、十三歳だったら、結婚してないとする事が出来ます。懐妊についても否定出来ましょう。サダ女については、文政十二年には生まれていない、成貞が江戸に到着してから儲けた子とすることも出来ます。

菊亭家で育った武者小路正姫は、飛鳥井家から望まれ、雅威と為実子縁組みをし、裳着の執り行いを勤修寺嫡流の名家「甘露寺」篤長(文化九年没 六十四歳)に頼み、光格天皇の「内ノ女房」新典侍「備子」として宮廷に出仕します。新典侍としての宮廷生活のなかで、従兄の菊亭尚季、義従兄の清水谷実楫、裳着親の嗣子甘露寺園長等との交際が重ねられ、また京都所司代時代の大久保忠真との交際もあつたことでしょう。この忠真と「備子」との交際が、わが子(菊亭)「房姫」がシーボルト事件とかかわり、その波及が小倉家におよぶに至り、小倉「吉姫」=菊亭「憲姫」=清水谷「豊姫」(園園)の大奥入りに関連して、後半生を成貞法尼として小田原で暮らす、契機となつたと思われまふ。

なお、ここで「成貞」の「字名」と「諱」の音訓について整理してみましよう。



6 公武合体の動きのなかで 「随季」は菊亭尚季の二男ですが、「寿丸」といった幼少時に小倉豊季と為実子縁組みをして、豊季の妻「文」



「薫」(成貞尼の雅号か)から「常媛君」宛書簡

左側：末尾部分 右側：書出し部分

に育てられました。そして長じて、菊亭家の「房姫」と通婚して、「輔季」が生まれました。そして輔季は、甘露寺園長と為妻子縁組みをし、園長の妻初子のもとで育てられることになっていました。輔季も、園長の実子となれば、その将来は保証されることになります。他方文政十年、随季と吉姫は結婚し、房姫の側室としての立場ははっきりします。しかし、シーボルト事件が起こり、「吉姫」は身を隠すこととなり、事件が一件落着をみたところで、「吉姫」出生の子が女子でしたので、この輔季が、小倉家を相続した訳です。いうまでもなく、輔季は、成貞の孫になります。

そして明治元年、東海道鎮撫総督として出陣した橋本実梁という公卿がおりますが、この人は輔季の子で、橋本実麗の養子です。実麗の叔母「勝子」が大奥上臈姉小路(勝光院)で、実麗の妹の経子が仁孝天皇の典侍で、皇女和宮の生母にあたります。また和宮を京都まで迎えに行き、御供に加わり江戸への案内役を勤めた大奥上臈花園は、清水谷公正女ですから、公正の妹にあたる豊姫と花園とは姪・叔母の関係になります。そして姉小路や花園と行動をともにしている小倉と飛鳥井という大奥上臈がおりますが、この小倉は一度姉小路等と隠退したが、和宮問題で再出仕した花園の改め名、そして飛鳥井が豊姫と花園の子のサダ女という関係が描かれます。

文久二(一八六二)年二月、和宮と成婚に關与した大奥上臈の縁戚関係と年齢を整理してみますと、
 姉小路 五十三歳(文化七年生) 橋本実麗の叔母
 勝子 勝光院

小倉 五十歳 (文化七年生) 清水谷豊姫 瀧園
 (小倉吉姫)

飛鳥井 三十四歳(文政十一年生) 小倉吉姫女 サダ
 成貞尼の義孫
 花園 三十二歳(天保二年生) 清水谷公正女
 豊姫の義姪

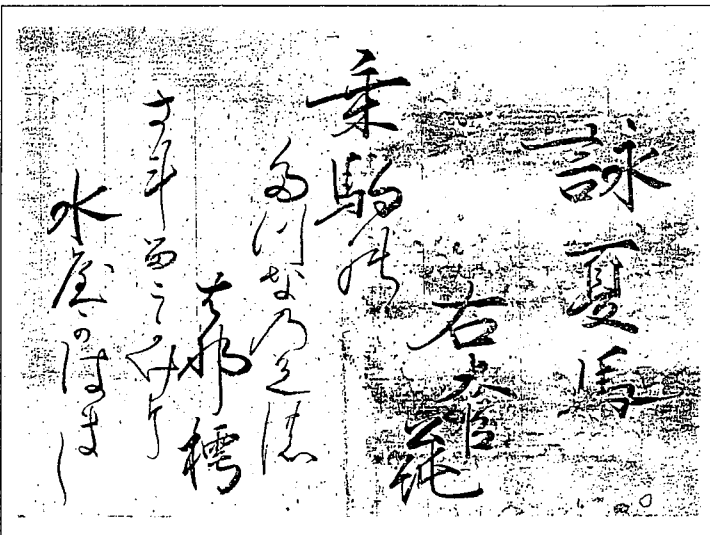
ちなみに最後の大奥上臈といわれる「瀧山」は、五十七歳。そして文久二年という年は、成貞法尼が、

浦風に 雲ながれ去り さやかなり
 名は もろこしの 有明の 月
 と、安政六年四月に辞詠歌を詠んでから三年後です。

7 墓参のすすめへの返書

サダ文書のなかに、「於多喜様」宛「さだ」書簡の手控えが残されております。お盆の墓参りを薦めて寄こした「多喜」への、「さだ」からの返信です。(宛字、仮名など、読み易いように訂正して記載しました)宛名人「多喜」は、「弘化二(一八二一)年十二月極御暮方御土台中勘」所載の「殿様女中多喜」と思われます。

昨日は非常の雨にて御地は如何に候也 一寸御様子御同申上候、当方にては何事もなく先御安心下され度候先御見舞迄二 伸申し上げ候 □□□□御無沙汰い



たし、御前様にはなんとも申しわけなく、平に御有下され度候、付ては 此頃は寒寒相成り、御前様御障も之なく、入らせられ候哉 御伺申上候 私も無事に候 まづ御安心下され度候、私より早々御たずね申すべき処 ついにせわしき故、御伺申さず 御前様はさだめて不実と御思召なされましたと、私は思い 必ず必ず悪く御思召下さらぬ様御願申す 是非是非 盆祭り参をきして御地へ一度参り度存じ 御主人に暇願をしましたけれど何分暇が出ず 遂に七月も墓参りもいたさず 実に残念に思います 外より□人には□し致されず御前様の御心を存じて於る故申します 度々御手数御恐入候とも御前様が墓参り候節は 線香の一本御立下され度候 偏に御願申上候 私もその内には一度参り候 一万 し申度故 御礼かたがた申しまいり申し候 次に寿の於ふじ様 宜しく

乱筆御免申候

あらあら

早々

落筆儀偏御拝談を思候

かしこ

さ堂 より

於多喜様

この書簡には、年月日の記載がありませんが、「多喜」を藩士牟礼兵衛(百五十五唐人町)の女、後の「石井タキ」としますと、『小田原近代教育史』「資料編 第一巻 三 寺子屋」に、嘉永二(一八五)年に「牟礼タキ」が私塾を小田原に開設し、慶応四年に廃業したとあります。また幕末のこの時期は、浄心院様はじめとして殿様のご家族ならびに奥向きの女中たちは、小田原に移られておられます。したがって文中の「御地」は、小田原と思われまます。ちなみに藩主忠愍は安政六年九月二十七日没、次代は忠礼です。この多喜も歌を詠み、『類題新竹集』に一首採録されております。小田原で、成貞法尼に師事していたことでしょうか。成貞法尼の初七日(四月二十一日 安政六年四月十二日没)に臨んでの挽歌でしょうか。

廿日月 ふしまちの 空ほのぼのと、明けそめて

はつかに残る有あけの つき

牟礼 漣子

この時期、幕府では皇女和宮ご降嫁が安政五年から検討されており、万延元年六月には、勝光院が上京し、橋本実麗にご降嫁に賛成するように動いているという状況です。文中の「遂に七月も墓参りもいたさず」という七月が、安政六年の七月か万延元年のかかりませんが、サダ女の多忙は、このことに関係しているかも知れません。上京中のサダ女に徳大寺公純が贈った一首は、

詠 夏馬

右大臣 公純

乗駒の 田津な乃先濃 者那構(はなおうち)

左計留こかげ耳 水屋かは支し

乗る駒の 手綱のさきの 花樽

避ける木陰に 見すや川岸

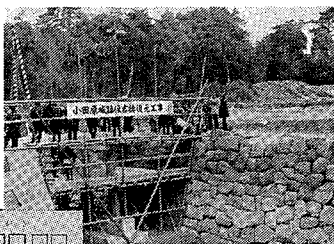
あとがき

成貞法尼は、サダ女の生母の墓を調べている過程で遭った女人です。サダ文書のなかに、明光寺へ一月二十四日の供養料を明治三十四年二月に届けている記録があります。明光寺は、東海道線開設の折に廃寺になり、隣地の同宗派の大久寺に移管された妙光寺と思われるが、後日調査したいと思えます。

成貞法尼についての伝承が絶えてなく、「壮妙」と称された彼女の詠歌など、作品が伝えられていないのは、どういふことでしょうか。剣持家文書には、成貞法尼筆と思われる詠歌十五首、等が残されておりますが、諸家の雑類等を丹念に調べれば、なお発掘出来るかも知れません。藤沢市文書館の高野修氏に紹介された「類題新竹集」に、成貞法尼の詠歌二首と忠貞の詠歌九首(春鶯集所収分五首の外四首)等を発見できたのは収穫でした。ぜひ心当りの方のご教示を得たいと思えます。別稿として、彼女の出自や経歴を、関係すると思われる

る公家の家譜等調査をふまえて、「成貞法尼出自考」を検討しております。「四 シーボルト事件」は、「成貞法尼出自考」の要約です。少ない資料・史料を素材として、出来るだけ自由な発想で分析することとし、多面的な想像と推測によって仮構をし、資料・史料がどのように符号・整合するか、資料・史料をつなぐ関係はどういうことなのか等々、検討を重ね合わせてみました。いずれにしても、この随草は、手許にある資料、たまたま得られた資料・史料の限度で、仮構(フィクション)してみた素描に過ぎません。今後の調査により、さらに事実関係を確認・検証、検討の上、書き直して参りたいと思っております。

この随草をまとめるに当たっては、本久寺住職の林憲孝氏、宗林寺住職の大柳一精氏、円福寺住職の木内雅明氏、蓮昌寺住職の立花昌徳氏、高田稔氏、有浦章氏に大変お世話になりました。高田氏には剣持家文書・吉岡信之書簡等の資料紹介をしていただきました。特に、立花氏には「日蓮宗寺院大観」(大本山池上本門寺編 昭和五十五年刊)を、また剣持孝文氏には剣持家文書のほぼ大半を長いこと、お貸しいただけました。(了)



平成2年1月14日
住吉橋架梁式

小田原城二の丸中掘の
復元工事が進んで住吉
橋の架梁式が行われた。

エコ一葉書



花園幼稚園：諸白小路

文と絵

隠岐威重

国道一号線を諸白小路のバス停で、南側(海側)に西海子に向って下る。その道を諸白小路といふ。百米ばかり下った左側に聖公会の小田原十字教会と付属の花園幼稚園がある。

老人(筆者七十二歳)は大正十二年の関東大震災の翌年にその幼稚園をおえた。園の舎家は地震ですべてくずれ、大きな天幕で卒業式が行われた。その黄ばんだ卒業写真、二十名ぐらいの幼児が天幕の前に、とりすまして並んでいるのが残っている。

老人の家は別にクリスチャンではないが、家が教会の目の前にあるので、自然に入園した。老人の二人の子供、孫の二人の男の子三代がお世話になった。日曜になると、教会の日曜学校に行き、調子外れの讃美歌を歌い、クリスマスになれば聖書の一節をしくんだ子供劇に出た。でも、とりすました日曜学校、そんな劇、遊戯は老人は嫌いだ。野に山に、虫を小鳥を追ひ、川辺で小魚を獲り、メンコ、鉄

ゴマ、竹馬と手荒い遊びが好きだった。

二言ならば悪戯鬼で、下品で、女の園長に嫌われ、何かにつけて辛くあたられた。でも、悪戯鬼はそんなことでは気遣れせず、町方の高職の子供と一緒に、天幕に登り、牧師先生に大目玉をいただいた。

M先生には嫌われていたが、海軍の関さんの娘さん、N先生は悪戯鬼のいたずらを含めて可愛がってくれた。そのN先生の紫色の袴のひだに顔を突込んで甘えることが出来て救われた。

黄ばんだ卒業写真の中央に丸顔の可愛い幼女がいた。その幼女が老人達のクラススのクインだった。M園長さんの秘蔵子で、たえずクラスの輪の中心にいた。でも、悪戯鬼達はそのことをとがめなかった。幼女自体、少しお高く上品に振舞っていたが、それが自然の彼女の姿、素地であることを知っていたから。また、彼女は父親をなくし、祖父と母親で育てられて

いることも知っていた。

色黒、背の高い筋肉質の老人が、眼鏡の中の瞳に笑をたたえ、孫の彼女の手をひき、園をよく訪れて来た。

園児達は、その顔なじみの老人が偉いんだと云われていることも知っていた。

その色黒の背の高い人は、貴族議員で、キンケイのマジコウ、宮中の錦鶏の間という御殿まで昇殿出来る立派な人だと親達から聞いていた。

そんな立派な人が、同じ園児のお祖父さんとは、自慢してもいいことだと思っていた。

後に、少しく大人になったころ、その色黒の老人は、室田義文といい、旧水戸藩士で藩校を経て、新政府に仕え、外務省に入り後に伊藤博文の秘書官を務めた人だと知った。

博文が北満のハルピンの地で兇弾に倒れた時、自身も流れ弾で傷つきながら博文を支えた。

後にメキシコ大使を務めた。その後実業界に入り、貴族議員員になっており、三井の大番頭、益田孝と昵懇になり、その案内で小田原の天神山(益田孝邸の隣)に昭和の始めに居を移したと聞く。

益田孝、室田義文、野崎広太(幻庵)孝の慶応大学後輩、孝に

兄事す。中外商業新聞社長、三井百貨店社長(後の三越)鐘紡重役等を兼任)この三人は大の仲良しで、

小田原に落付いてからは日夜、茶の湯三昧、また、明治の若者達の娯楽の花札、それを夜毎ひき、小銭をかけ、五銭十銭の勝ち負けに財界の巨頭達が大声をあけて、若き日をしのんで楽しんでた様を、孫娘、かつてのクインの媼が笑いながら老人に語った。

野崎幻庵のお宅も教会の一家おりて海側の隣り(元宿谷邸・現田中邸)にあった。先般小田原市に寄贈された茶室幻庵もそこにあった。

本宅は東京澁谷にあったが、老は殆ど小田原市で過ごしていた。孫も手許に呼び、花園幼稚園に通わせ、老人の下の級にいた。祇園大学出身、美しく肥ったかつての美人の老夫夫人から口に鮎玉を入れてもらい、キャッキヤッと喜んで跳ねまわった。

正月の箱根駅伝の時、野崎老は、国道一号線と諸白小路の境に椅子を置き坐り、手に長い杖を持ち着ぶくれた小がらな体を二重廻しにつくみ、大黒様のよくな頭布をかぶり寒さを防いで、走者の通過するのを観ていた。

慶大の走者は、爺の前を通ると必ず会釈して走り去っていった。老は慶大の大先輩、三越

の社長にある人に後輩が礼をするのは当然かも知れぬが、必死で走る走者が、敢えて会釈するのはスポーツ道としてはどうかなど、もはや面砲盛んな年頃になつていた老人には、いさゝか割切れぬ気持がしなくてもなかった。他にも変り種に、一時期小田原十字町に住んだ谷崎潤一郎の娘さんも通園していたとか、曾てのクインが云うが、老人の記憶では詳かではない。新潮社の谷崎伝にのっていると媼は云うから本当だらう。

園児の父兄には官界、財界、日露の後の將軍連が多く、教会幼稚園の周りはいよいよ家に恵まれていたことになる。幼児であつた老人には教会の財政面は知るよしもない。

が、その日の糧に困る人々に囲まれてるよりましであつたらう。キラキラした金の光りは感じなかったが、ゆつたりとした余裕が何かをもの語っていた。

英帝(ヘンリー八世(四九一―一五〇三))という気まぐな王様がいた。己が離婚し、新妻を迎えんがため、この宗派(英国々教会 anglican church)は生れた。離婚に反対するローマ教皇庁に対し、ローマの指図はうけぬ。として、それまでカトリックだった英国がローマから独立して國



花園幼稚園

家教団をつくり、教権まで俗人の国王が握ってしまった。ヘンリー八世は職業的僧侶の痛烈な罵倒者だったエラスムス(四六三〜三六)と文通するほどに知的好奇心の強い人物だが、教義の上では保守的で、内容はカトリックのまゝでいゝではないかという程度に問題を放置した。後に、イギリスにも新教運動が強くなり、さまざまな流血の末、A・Cの教義も変化し、多分に新教化した。

新教には儀式らしいものはない、それにひきかえ旧教は儀式だらけだ。

両派の中間にあるA・Cは旧教の儀式をたくみに再編成したところに魅力がある。

世界に冠たる英国王室の儀式と演出は、ひとえに英国々教会の功績といつていい。それを演出する大プロデューサー、カンタベリー大主教は大したものだ。日本渡来は存外古く、幕末、大老井伊直弼が日米条約に調印(安政五年・一八五八)した翌年すでに入っている。(以上司馬遼太郎の『愛蘭士紀行』より孫引き)

設立したが、正式に認可されたのは、大正八年四月であった。教会・幼稚園とも、横浜の聖公会支部の管理下にある。

前述の如く、明治の終りから大正・昭和の初めにかけて、小田原の板橋の山側斜面と、十字町周辺には、政財界の有力者、有名文人が多く住んだ。そんな人達の子弟も多くこの園に集った。たとえば、野崎幻庵も室田義文も益田孝にさそわれて居を小田原に移し、茶の湯三昧の生活と同時に家族まで当地にとめない、同園に通わせた。

もう一つ。わが老クインの媪の言によれば、早川口にあった軽便鉄道駅の車夫に、ワ嬢が毛糸の編物を伝授している姿を覚えていたとも言う。

老人が通園していた頃、いやそのもつと前からだろう、そして敗戦後も十年ぐらいの間、亡くなられるまで、同教会の牧師を宮沢九万象師が務めていた。ゴマ塩頭のまる坊主、坂本九チャンの「上を向いて歩こう」よろしく、頭を常に上方に向け、眼を細めて空を見上げて歩いて

いた。教儀の時は黒の牧師服だが、平常はツンツルテンの和服に下駄ばき、小型の西郷さんのようだった。

説教が上手とか、人がらもよ、信者にしたわれていた。

なき今、現在でも、近所の商店主達、宗教とはあまり縁の遠そうな中高年の人達が、聖書を抱いて水曜礼拝に参する姿を見るとき、宮沢牧師の遺徳がしのばれる。

この辺で教会・幼稚園の語りを終る。

題名を「花園幼稚園：諸白小路」と記したので、諸白小路の点景を余談として誌そう。

教会のな、め前に旧榎本武揚の別邸がある。

地震で全壊し、震災後新築し

現在に至っている。

あの揺れで、目の前にあった榎本邸の大きな白壁の土蔵が視界から見え、急に空が大きく開いて見えたことを隣りに住んでいた老人はよくおぼえている。

その地震で数名いた武揚の孫の一人の娘さんが圧死してしまった。地震では、何処の家でも重傷者か、死亡者は一人ぐらい出たはいたが。

「榎本さんのお嬢様が亡くなられた。お可愛そうに……」と老人の親達は語っていた。

あの頃の時代がしのばれる言葉だ。

そのお嬢様達の友だち、老人の長姉の言によると、お嬢様達は夕餉の魚の塩焼きの大小で争うこともあると聞き、その方が人間臭くてたのしかった。

もう一方、お孫さんの長兄か？大変立派な姿の男子がいた。巷では彼を若様と呼んでいた。上等な紺ガサリの着物、黒足袋で、いつも分厚い桐の上等な下駄をはき巷を散歩していた。

ポリオでも患ったか、足でも悪いのか、歩行に高低があり、それを直すために、右手で空をかくようにし調子をとっていた。

青くそり上げたあご髭、大きな瞳の立派な顔だち、武揚がおれば、その様な姿、顔形をしているのではと想像していた。

お隣りなので若様は老人をよ

この教会は正式には、日本聖公会聖十字教会というが、明治三十二年(一九一九)S・B・G代孝イデヤコノシ・ショウ師オードレ監督の許可を得て小田原に伝導を開始したのでその始まりである。

一方、花園幼稚園は、関重忠機関少将夫人関きみ子女史が、有志者の寄附を得て大正六年に

園の中に、重視していったのだらう。

ミス・ワーズワーズ(有名な英国詩人ワーズワーズの姪)とかミス・メビルという有力婦人宣教師を派遣し、教会の裏手にある宣教師館に住まわしていた。大正の終りから、昭和の始めの頃だ。

黒衣をまとい、烏天狗のような鼻、白い頬に赤いバラ色をうかべたワーズワーズさんが拙宅の玄関に現れ、英語の挨拶の発音を何回も直されたのには閉口した。また、当時ではめずらしい英国製の黒塗りの婦人用自転車を乗り廻す黒衣の老嬢の姿を幼児は口をポカンと開けて眺め、異国の香りを感じていた。

園の中に、重視していったのだらう。

ミス・ワーズワーズ(有名な英国詩人ワーズワーズの姪)とかミス・メビルという有力婦人宣教師を派遣し、教会の裏手にある宣教師館に住まわしていた。大正の終りから、昭和の始めの頃だ。

黒衣をまとい、烏天狗のような鼻、白い頬に赤いバラ色をうかべたワーズワーズさんが拙宅の玄関に現れ、英語の挨拶の発音を何回も直されたのには閉口した。また、当時ではめずらしい英国製の黒塗りの婦人用自転車を乗り廻す黒衣の老嬢の姿を幼児は口をポカンと開けて眺め、異国の香りを感じていた。

園の中に、重視していったのだらう。

ミス・ワーズワーズ(有名な英国詩人ワーズワーズの姪)とかミス・メビルという有力婦人宣教師を派遣し、教会の裏手にある宣教師館に住まわしていた。大正の終りから、昭和の始めの頃だ。

黒衣をまとい、烏天狗のような鼻、白い頬に赤いバラ色をうかべたワーズワーズさんが拙宅の玄関に現れ、英語の挨拶の発音を何回も直されたのには閉口した。また、当時ではめずらしい英国製の黒塗りの婦人用自転車を乗り廻す黒衣の老嬢の姿を幼児は口をポカンと開けて眺め、異国の香りを感じていた。

く知っていた。可愛い声で「タケシゲサン 今日日は」と声をかける。幼児は照れて小声で「コンニチワ、ワカサマ」と答えた。

もう一つ。

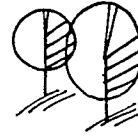
益田・室田・野崎の三老のことを記したが、老人達は自分達の身を調べてもらうために、やゝ強引に、東大の入沢内科の四天王の一人といわれた仙台藩士出の片倉寿雄医博を小田原にまねき相談医とし、旧榎本邸に居を与えた。名医の誉が高かった。

古宮萬寿夫氏を偲んで

富田 千春

古くからの小田原史談会の熱心な会員で、郷土史の研究に情熱を傾けられた古宮先生、都市開発で消えてゆく、路傍の古塚、石碑、村内の行事、史話、伝説、「故郷を忘れないため今のうちに」と執筆に立ち上って八ヶ年三百余頁の『東大友、西大友、延清、郷土史』をまとめて自費出版され、地元的全世帯に無料配ったのが昭和五十六年五月でした。

遺族の家を廻り戦没者名簿功績、さては地元出身の偉人の足跡を訪ねて、北は北海道、南は大分と調査に出かけ、大量の文献を盛り込んだ部厚い著書、すばらしい遺産です。行年八十一歳、大先輩としてまだまだだと思つて居りましたが、風邪が元で肺炎併発、二月六日不帰の客となり、大友氏の館跡近い、由緒ある曹洞宗、西大友盛泰寺で、八日しめやかな野辺の送りが行なわれました。



(終り)

今の片倉歯科医師は寿雄氏の甥である。だいぶ時代が下るが、戦中後に劇作家の北條秀司・詩人の三好達治も一時当小路に住んでいた。

不敵な人間句を遺した

穂坂志朗君

高田 掬泉

穂坂志朗は、小田原地方俳壇では他に類を見ない独特な俳句を作った人であった。私は彼とは個人的な深いつきあいはなかったが、彼が俳句の世界に入ってきた昭和四十年頃から、その特異な雰囲気を持つ句風に接して、いつも目を眩らされたものである。

軍手とは軍隊で使ったからその呼ぶのだが、白木綿の実用的な手袋である。今でも作業用の手袋を軍手と呼ぶ。軍手は労働する人間専用のものだ。労働は貴いなどと言うが、辛くて哀しい仕事である。キレイごとでない人間の生きる姿そのものである。

穂坂志朗。昭和六年生れ、下曾我の菓子屋さんである。菓子職の常として齒を失っていた。

芹なづな酒吞まぬ日をつくれとよ

その反面、酒が無類の好物であった。結局その酒のために生命を縮めたのかも知れない。彼が遺した唯一の句集『曾我山』には、彼の面目躍如たる俳句が次から次へと展開する。

彼は自ら酒豪と称したが、皮肉にも酒吞まぬ日をつくれと、他人事のように詠んでいる。一筋縄ではゆかぬ彼の性格がよく出ている。

軍手ほど哀しきものはあるべかり

句集『曾我山』を刊してからさらに力強い句を見せてくれるものと思つていたのに、彼は大病を得て俳句を中断せざるを得

なかった。しかし永い闘病生活のち退院し句友の強い勧めもあって、再び句作をはじめめるや間もなく、昭和六十三年十月十六日、ついに帰らぬ人となってしまった。彼の最晩期の句に

黒揚羽 静かに肌の動くなり

というのがある。何か生命の最後の動きを見つめているような気がしてならない。近頃、ぬるま湯に入っているような俳句の多い中であつて、彼は常に詩情がこぼれるような珠玉の句をいつも見せてくれた。まことに惜しい俳句作家を失ったと嘆かずにはいられない。俳句は単なる十七文字の組合せであつてはならない。其処に人間の生命が躍っており、人間の哀しさの真底をのぞかせてくれる目がきらめいていなくてはならない。いま俳句氾らんの中であつて、穂坂志朗の貴重な存在を改めて思い返す昨今である。

報 訃

宇野應之氏(浜町一四一三 本会々員)一月二十日逝去されました。享年七十九歳。

古宮萬寿夫氏(西大友三七〇 本会々員)二月六日逝去されました。享年八十一歳。

星野貞之氏(南町三二一四七 本会々員)三月九日逝去されました。享年五十四歳。御冥福をお祈りします。

これからの俳句

佐藤柳舎 (幸太郎)

私は今や小田原市の文化は見直すべきときに来ていると思う。

小田原市には長い歴史と人情が花咲いている。とりわけて近世の偉人に二宮金次郎がある。元旦や今年もあるぞ大晦日

尊徳

全国的にあまりに有名な句を残しているのだ。この句には尊徳

の気魄のほどが伺ひ知れる。

この句は抒情句で、私のすきな詠み方で、小田原人の気概がある。仇やおろそかに出来ない句である。とくと味わって頂きたい。

さて私は俳人として今までに誰も手がけなかった独創の「これからの俳句」の草稿を史

談会に残し、後の世の語り草としたい。

平成元年の今年には俳聖芭蕉の「奥の細道」三百年に当り、ゆかりの各地で三百年祭が行はれている。まことに結構なことである。芭蕉は俳諧の句より連歌に秀れた巨匠である。又西行の歌枕の足跡を偲び、鳥が飛び立つように心置きなく旅立つて。旧三月下旬のことである。

旅立の一句
行く春や鳥啼魚の目に泪
の句を残し旅立っている。

旅の途中、同行の曾良は腹を痛め伊勢の国長島と云所にゆかりあれば先立って行くに

行き行きてたふれ伏すとも萩の原 曾良
と書き置きたり。
そして旅の最後に
蛤のふたみにわかれ行く秋ぞ
と奥の細道を結んでいる。

芭蕉は奥の細道の旅のあと七年間の長い年月をかけ、推敲に推敲を重ねて、曾良に代筆させて世に出したのが「奥の細道」なのである。この紀行文にはい

くらか事実と違った虚構もまじって面白。芭蕉はこのち大阪において五十一歳で没している。

旅に病んで夢は枯野をかけ廻る 芭蕉

芭蕉の句は「わび」と「さび」を生命とすることが有名だが、晩年には「軽み」の句に傾倒している。

そもそも発句とは連歌の最初の句のことで、付句の脇句を捨て去ったもので、独立して詠む句のことである。今さら言うまでもなく、俳句とは明治の初めまで俳諧であり、発句と呼ばれていた。明治以前の句は町人の間に大流行し粋な句が少い。雑俳の句、俗調の句が中心であった。従って月並の俗句が全盛であった。だが雑俳狂句から粋な川柳が芽を吹き独立していることは、見逃せぬ庶民の文化ではあるまいか。現在も俳句は、日本図書館法による文学の分類では発句として区分取扱されている。私も俳諧を考え発句がふさ

丹沢山塊主稜の尾根には、幸いに万古不変の原生林が今も豊かな自然の姿を見せてくれる。その原生林の主な樹の種類はブナであって、日本の太平洋側に発達した数少ないこのブナ林は学術的にも貴重とされている。丹沢のブナ林には性格の違う二つのタイプがある。一つは急斜面の山肌に成立したブナ林でそこには雨水が停滞することなく流れ下るから比較的乾いた林床となつてササが群生する。他の一つは尾根やピークのやや平坦な地形で雨水が停滞し、湿潤な土壌環境に形成されるブナ林である。その林床にはササが生育

丹沢の植物 ③

城川四郎

せず大型の草が茂る。もともと日本のブナ林はその林床にササが茂るのを特徴としているからササを伴わない丹沢の湿性ブナ林は特異な存在ということが出来る。

さて、そのブナ林にはしばしば貴重な植物たちが登場する。ここに挙げるレンゲシヨウマもその一つである。花は蓮の花に、葉はサラシナシヨウマに似るので蓮華升麻という。

レンゲシヨウマ (きんぼうげ科)
Anemonopsis macrophylla
Sieb. et Zucc.



(筆者原図)

上品でいかにも日本的な風情がある。実は、この植物は日本

特産の種類で、世界中にこれに類似する植物もない、正に日本の風土の中で生まれてきた日本の草なのである。神奈川県では丹沢にだけ分布する。六〇種ぐらいの花茎を伸ばして球状の蕾をまばらに着け、吹きわたる涼風に揺れながら淑やかに花を開く。丹沢の夏の風物詩である。

俳句の句調には主観句と客観句とあり、面白いことに句が百年毎に逆転する事実が見られる。百年で流行し百年で衰退する時勢がある。客観句「蕪村一百年、主観句「茶百年など、つまり百年毎に句に進展があり進歩があると言える。

私に言はせれば、俳句とは読んで字の如く人に非ざる句のことである。正岡子規が、発句を排去して、俳句にしたが、思い切った句に対する処置ではないかと思惟する。客観俳句とは季語をもって感情を表現するため直接感情をもって表現することを禁じたのである。

しかし私は句とは浪漫を基調とし、意識して作らねばならぬと思う。句に夢があり、あいまいさが多く、世の中をあっと言はせる強さと、大胆と清潔さに欠ければ一流の俳句とは言えない。

逝く秋を没日の秋の記憶とす
柳 舎
霜柱踏めば山みな迎い来る
柳 舎

有名俳人の抒情句を少し拾ってみると
ねむりても旅の花火の胸にひらく
林 火

中年や遠くみられる夜の桃
三 鬼

私が主張する「これからの俳句」は本格的抒情句である。
(平成元年六月)

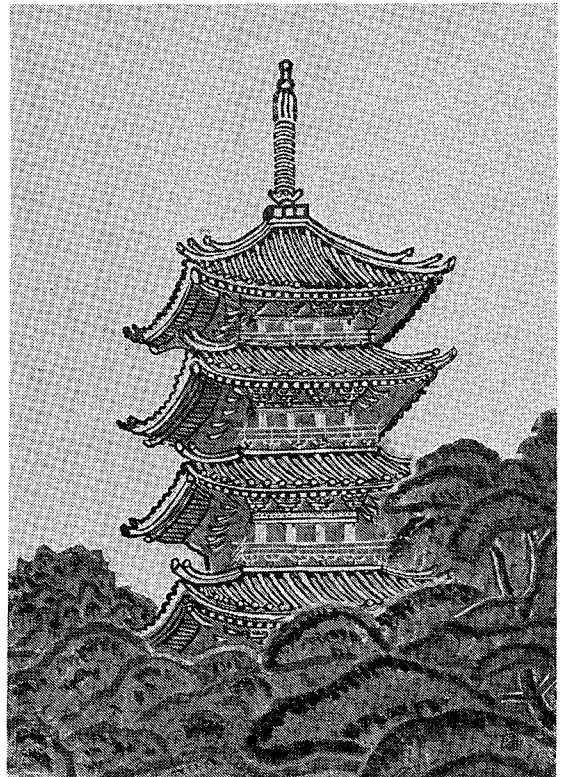
柳舎氏の文にはまだまだ多くの俳句事例が書かれていますが、紙面の都合上割愛させて頂いたことを深くお詫び申し上げます。

(編集委員会)

小田原地方の方言

おそい
ずるいの意
づない
強い意
がっつ
強調するとき使う
ひっちゃぶく
破ぶること
わりやあ
あなたのこと
(泉)

富田千春作 五重塔寺口竜鎌倉 版画



日蓮上人法難・片瀬刑場の地
昭和63年9月11日(日) 鎌倉方面史跡めぐりの寺

小田原史談会諸行事

上州路歴史探訪

平成元年十一月二十六日(日)・二十七日(月)の一泊二日。七時出発。コース初日、茂林寺、鑊阿寺、足利学校、金山城址、大光院、天神山古墳、円福寺、茶臼山古墳・台源氏館跡、反町館跡、生品神社、東照宮・長楽寺、宿泊群馬県蕨塚・ホテル伏島。二日目、多胡碑、貫前神社、旧官宮富岡製糸場、妙義山。帰着六時三十分。会費二万四千円。参加者二十一名のため、マイクロバスを使用しましたが、小廻りがきき、太田市街を見おろす

金山城址や、狭い道路を通りぬけ、旧官宮製糸場内まで乗り入れが出来ました。解説に高田喜久三、和田登、岡部忠夫の諸氏が当り、先導役の飯田悟郎氏は途中に出会った(予定にはなかった)古墳の解説を加え、また、妙義山の成因について疑問が出ると、若き日地質を研究したところのある相澤会長が説明を加え、さらに上州名物のこんにゃくに関連して富田千春氏が蘊蓄を傾けるなど、車中は和氣藪々の雰囲気包まれました。

参加者次の通り(敬称略)。

相澤栄一、和田登、富田千春、飯田悟郎、岡部忠夫、高田喜久三、小平信之助、時田武平、野村信、吉池清、堀越真一、小室定尾、鈴木重信、曾我保夫、山口一夫、湯川玲子、伊藤高子、剣持芳枝、大木俊子、和田ヤス子、萩野美穂子。(順不同)

なお、和田登氏は、今回の旅で次の稿を寄せられた。

上州の旅 和田 登

新田義貞の首が小田原に埋まっています。酒匂川の川止めにあつて、ここに眠ることになったのです。

義貞の故郷は上州です。

- 「太平記の里」といわれています。史談会では、館林市、足利市、太田市、新田町、吉井町、富岡市を廻りました。
- 両毛を分ける大利根冬景色
- 中世の屋敷にうつる冬の陰
- 義貞の清澄心や冬の蝶
- 大公孫樹貫く天の青さかな
- 義貞の拳兵の社公孫樹ふむ
- 禅寺の狸と遊ぶ小春かな
- 鑊阿寺の屋敷を廻る水澄めり

郷土関係の刊行物 平成元年7月~12月

小田原図書館並びに市内3書店調査

- ◇おだわらー歴史と文化
第3号 小田原市文化室編
A5 155P ¥1,000
- ◇小田原地方新聞記事目録(横浜毎日新聞・横浜貿易新報・神奈川新聞 明治4年8月~昭和60年4月)
小田原市文化室編 B5 377P ¥1,500
- ◇箱根宿歴史地図英語版 中村静夫編著 中村地図研究所刊
B全紙 ¥1,000
- ◇かながわの川(下) 神奈川県高等学校地理部会編 神奈川新聞社刊
B6 270P ¥1,500
- ◇小田原古きよき頃(画文集)
小暮次郎画文 文化堂印刷刊
24×24cm ¥3,800
- ◇小田原ガス75年の歩み 小田原瓦斯株式会社 B5 302P
- ◇八幡山の青春譜(小田原中学校卒業40周年記念誌) 20×21cm 250P
- ◇私の映画昭和史 廣澤栄著
岩波書店刊 新書版 247P ¥550
- ◇箱根神社信仰と文化 箱根神社著
日正社刊 B6 455P ¥2,000
- ◇箱根の昆虫 箱根叢書14 佐藤勝信著 神奈川新聞社刊 新書版
235P ¥ P50
- ◇真説戦国北条五代
学研刊 B5 201p ¥1,000
- ◇かながわウエスト(観光ガイド)
県西地域広域圏協議会編 夢工房刊 A5 171P ¥1,000
- ◇耳庵 松永安左衛門
白崎秀雄著 新潮社刊
46変形上376P 下356P 各 ¥1,500
- ◇霊界からの手紙 間中喜雄著
医道の日本社刊(再版) B6 261P ¥2,060
- ◇短編春秋 第2号 神奈川短編小説の会 ぼろーる社 B6 158P ¥1,200
- ◇小田原文芸 第2号 小田原文芸同人会 A5 136P ¥800
- ◇詩集紫蘇の実匂ふ 杉山まさ子著 杉山茂夫編 B6 294P
- ◇杉山長風集一杉の風(日本全国歌人叢書)近代文芸社刊 B6 98P ¥1,200
- ◇歌集すぎ 杉の会編 A5 120P
- ◇合同句集 小田原俳句協会編 B6 537P
- ◇二宮むかし話 松本昇平著
伊勢治書店刊 B6 ふるさとの歌(140P ¥620)、呼子鳥(90P ¥620)、ふるさとの花(174P ¥620)、大人の童話(63P ¥410)
- ◇夢枕獏著(小田原出身)
写真集 神々の国 人の国 双葉社刊 18.6×20cm 119P ¥1,800
仰天プロレス和歌集 集英社刊 B6 189P ¥880
仕事師たちの哀歌 集英社刊 A5変 276P ¥1,000
猿対談中 大陸書房刊 46版 313p ¥1,200

(以上十七名 順不同)。
 曾我保夫、向山重忠、山口一夫、中村俊郎、中沢鏡子、高橋佐年、増山晶子、伊藤岩恵、西山辰三、岩本宣明、富田千春、西山銈太郎、川茂三郎、岡部忠夫、岩本武、相澤栄一、下氏は、学生時代からの浮世絵のコレクターで、小田原・箱根に関するものを、主として蒐集されて来た三十年の経歴を持たれるだけに造詣深く、大いに啓発され、有意義な充実した内容でした。
 参加者は次の通り(敬称略)。

- 冬枯や古文書の墨目にしみる
- 子育ての呑龍さまの七五三
- 氏康の出城の紅葉散り初むる
- 冬霞新田の荘の暮れゆけり
- 義貞の生誕の地や石露の花
- 義貞の館をめぐる冬帽子
- 冬麗の旗上げの宮静まれり
- また古墳千年前を冬の旅

○多胡の碑に奈良朝文化の春をみる
 ○冬空の貫前神社眞上から
 ○冬されの奇岩怪石のしかかる
 ○妙義山釜めし噛んで急ぎけり
 高尾山初詣 一月二十五日(日)に実施。七時出発。四時三十分帰着。コース
 大正天皇多摩陵・貞明皇后多摩東陵・昭和天皇武蔵野陵―高尾山(墓王院有喜寺昼食精進料理)―相模湖。会費五千円。解説には、高田喜久三、富田千春、

岡部忠夫の諸氏が当りました。帰りの車中では、相模湖が、横浜、川崎、横須賀の水源になっている話に関連して、山口一夫氏から、昭和八年の小田原水道事件について、吉池清氏から印刷局の水源についての話などが出て、墓王院の昼食で、全員に般若湯が出たことも手伝って、雰囲気盛りあがりしました。参加者は次の通り(敬称略)。
 和田登・ヤス子、高田喜久三、荻野美穂子、富田千春・キミ江、森美奈子、北村佐知江、西山銈太郎、西山辰三、小林房子、綾部ユキ子、田中ヒサ江、石黒敬

子、吉崎ヨシ江、国見隆彦、青木キヌコ、横尾ユミ子、小平信之助、柳川辰夫、笠恵子、山岸忠三、小泉邦夫、飯倉リツ子、内田公子、金子正夫、吉池清、鈴木重信、相澤栄一、岡部忠夫、曾我保夫、力石郷水、岩本武、小山俊夫、関田トミ子、稲子藤江、木曾正雄・シゲ子、徳永トキ子、額田常子、加藤松江、山口一夫、浅倉トミ子、高橋光江、剣持芳枝、山口廣子、奥津萬里子、奥津ハナ子、石井艶子、田島迪江、小島美代子、中村俊郎・ツヤ。(以上五十三名順不同)
 倉時代の刷り仏(木版)を例に、その源流について解説をされた。

講座 「小田原・箱根の浮世絵について」
 二月十日(日)二時~四時、於湯本・正眼寺。講師岩崎宗純氏(任職・小田原市史編纂専門委員)
 最初に浮世絵の発達とその時代背景の説明をされ、そのあと所蔵の一部の安藤広重、葛飾北斎、鳥居清信、小林清親の版画について解説され、ついで、版画の浮世絵は、江戸時代に突然生れたものでなく、正眼寺の佛像の胎内に秘められていた、鎌倉時代の刷り仏(木版)を例に、その源流について解説をされた。

落穂集

◎本会報は、国立国会図書館に送っておりますが、最近各地の公立図書館・文化機関からの要請もあり、また、大学図書館や大学教授個人らの申し越しがあります。これも、会員の皆様

のことが既に歴史となっております。体験なされた身辺の出来事を、まとめてお送り下さい。なお、その節は写真を添えて頂ければ幸いです。写真は返却しあげます。

大皇祭の当日、会館の部長が衣冠束帯姿で祝詞を奏上し、お慰めし続けてきたことを報じました。昭和天皇がお亡くなりになられたので、昨年は実施されなかった由、今後ともそうぞうです。

浦鉾は昨年暮に発売されました。◎保険代理店を専業にしている日氏、五十路の坂を越え、仕事に熱中するだけが能でない、一人暮らしの身軽さから、近頃、余暇を作り出しては、国内の小旅行を試み、その記念にと集印に凝り出しました。札幌では、

集印する人がいないので、寺では勝手を知らなかったのではなにか」と。
◎なにに書いてあったのか記憶がはっきりしません、箱根八里は馬でも越すが、越すに越されぬ、の「箱根馬子唄」の元唄は、越すに越されぬ大晦日、であったとか。

◎本会報第一三六号(昨年三月発行)のこの欄で、東京千代田区にある、結婚式場を営む会館で、「大正天皇はお気毒な方で、あると、十一月二十五日の大正

の金箔食品が登場。金箔小田原からありましたが、最近、ラーメン、こんにゃく、米、おむすび、角砂糖、お茶、和菓子など

相場で、高くとも三百円だと伝えると、寺では、それなら、その金額でよいと言われたので、千円を渡した由。そうして、札幌のもう一つの大きな寺院では

金はいらぬ、と受取らなかつたが、気が済まない、御布施として千円置いてきたそう。H氏曰く「北海道の寺院を詣りして

◎紅茶きのこ、甘茶つる、酢大豆とかの健康法、ワァッと盛り上っては、いつの間にか消えてしまいました。根強いのはクローラであるとは、日々の新聞折込広告を集計して楽しんでるAさんの言で、その宣伝紙は驚くなけれ、九社に及ぶとのこと。
◎『紅蓮洞坂本勇徳』は紙面の都合で次号に回しました。
◎次号の発行は五、六月を予定しています。(陶生)

特別賛助会員

- 智恵袋 相田酒造店
- 小田原銀座 アオキ画廊
- 足柄香粧株式会社
- 飛鳥屋
- 紳士服のアメリカヤ
- 画材 ガクブチ
- 伊勢治書店
- かまぼこ
- 株式会社 江島
- 株式会社 小田原魚市場
- ◎小田原ガス
- 小田原信用金庫
- 小田原報徳自動車
- 株式会社 オートセンター・スギヤマ
- ◎小田原中央青果 株式会社
- かまぼこ 籠
- 令 学 苑
- 鐘紡株式会社小田原工場
- カネボウ化粧品鴨宮工場
- かみやま小児科クリニック
- 興電社
- 清水甘納豆

- 正 榮 堂
- 鈴木 廣 木 ま ぼ こ
- 辰 寿 堂 ス ポ ー ツ
- 大 営 不 動 産
- 割烹 お る 海
- ◆ そ び そ ニ 宮
- 茶半家具株式会社
- ちん 聖 う 本 店
- 角田ガクブチ店
- 株式会社 東 華 軒 店
- 八 小 堂 書 軒 店
- 八 子 マ 書 軒 店
- 平 井 書 軒 店
- 富士写真フイルム 小田原工場
- 株式会社 報 徳 屋
- 松 坂 マ ル ク
- 学生専科
- 食器の店 マルサンストア
- 株式会社 美濃屋吉兵衛商店
- ヤオマサ株式会社
- 山 口 菓 子 舗
- 湯浅電池 株式会社 小田原工場

衆議院総選挙第5区選挙ポスター(平成2年)

